

22 『パステル』 成井豊

○ ジャンル / SF

○ ストーリー / 笠岡光春は23年前に亡くなった兄・秋路に会うため、クロノス・ジョウ  
ンターで過去へ跳ぶ。が、23年前に到着した瞬間、自転車を通りかかった少女と衝突。  
少女は頭を強く打ち、記憶を失ってしまう。が、「リン」という名前だけは覚えていた。  
光春は秋路とともに、リンの身元を調べることにするが……。

○ 出演者 / 男5 女3 計8

○ 上演時間 / 110分

登場人物

笠岡光春

(P・フレック開発二課研究員)

秋路

(光春の兄、大学5年)

リン

(小学6年)

倉敷

(P・フレック開発二課研究員)

野方

(P・フレック開発三課課長)

吉本

(P・フレック開発二課課長)

赤磐

(リンの叔父、会社員)

絵子

(秋路の恋人、会社員)

二〇一五年三月三〇日朝。神奈川県横須賀市、住島重工の系列会社の倉庫。笠岡・倉敷がやってくる。笠岡の背にはリュック、倉敷の肩にはバッグ。

倉敷

へえ、ここが野方さんの秘密研究所ですか。

笠岡

本人はそう呼んでるけど、大した設備があるわけじゃない。実態はただの倉庫だよ。

倉敷

クロノスはどこに？

笠岡

このフェンスの向こうだ。今、野方さんと吉本さんが最終チェックをする。僕も荷物のチェックをしないと。(リュックを下ろして、中を見る) 倉敷すみませんでした。出発の日にまで押しかけてきちゃって、別に構わないよ。君にはいろいろ準備を手伝ってもらったし。

笠岡

私、前々から、野方さんの研究に興味があつたんです。でも、まさかそれがタイムマシンだとは思いませんでした。

笠岡

僕だって、自分がそんなものに乗ることになるとは、全く予想してなかったよ。

倉敷

そうだ。(バッグから新聞を取り出して) これ、よかったら、持っていていつてくください。今朝の新聞です。

笠岡

(受け取って) 「平成二十七年三月三十日」。これを見せたら、お兄さん、

倉敷　　ピツクリするだろうな。ありがたく頂戴するよ。  
笠岡　　気をつけて、行ってきてくださいね。  
倉敷　　ああ。次に君と会えるのは、二十五年後だな。それまで元気で。  
笠岡　　笠岡さんこそ。

そこへ、野方・吉本がやってくる。

野方　　あれ？　お邪魔だったかな？  
笠岡　　おかしなことを言わないでください。僕と倉敷さんはそういう関係じゃありません。

野方　　知ってる。正面攻撃をして、見事に玉砕したんだろう。

笠岡　　その話は誰から？　ウチの課長からですか？

吉本　　僕は何も言っていない。

野方　　（笠岡に）おかげで、君は過去に行く決心をした。倉敷君には心から感謝している。

吉本　　野方さん、彼は心の傷を癒すために行くんじゃない。お兄さんに会うために行くんです。

野方　　怒るな、吉本。俺は実験前の緊張をほぐそうとしただけだ。

吉本　　おかげさまで、十分ほぐれました。そろそろ実験を開始しましょう。

野方　　オーケイ。倉敷君、君がここに来るのは初めてだったな？　前にクロノス

倉敷　　を見たことは？

野方　　過去の実験は動画で見ましたけど、実物はまだです。  
倉敷　　だったら、見せてやろう。これがクロノス・ジョウンターだ。

野方がテーブルの上のノート・パソコンのキーを叩く。フェンスが開いて、奥のクロノス・ジョウンターが姿を現す。

倉敷 凄い。動画で見た時より、ずっと迫力があります。

吉本 笠岡君、準備はいいか？

笠岡 はい、いつでも出発できます。(リュックを背負う)  
ボグは装着してるな？

野方 (左手の手首を示して) はい、ここに。

笠岡 向こうに着いたら、すぐにこのボタンを押せ。エネルギーの残量はこの画面に表示される。黒い線が十本。この線がすべて消えたら、君は未来に弾

野方 き飛ばされる。  
わかっています。

笠岡 荷物は常に自分の身近に置け。新型ボグの有効範囲は半径二メートル。それ以上離れると、やはり未来へ弾き飛ばされる。

吉本 それもわかっています。  
じゃ、僕からも一つ。向こうに着いたら、なるべく急いで手紙を書いてく

笠岡 れ。宛て先はP・フレック開発部の野方耕市。中身は到着時間や到着場所をできるだけ詳しく。書き終わったら、その手紙を信頼できる人物に託し

野方 てくれ。「この手紙を二〇一五年の三月二十九日に投函してください」と

笠岡 言うて。

野方 それはつまり、その人にその手紙を二十三年間保管してもらうってことですか？

吉本

笠岡

吉本

野方

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

野方

笠岡

笠岡がクロノス・ジョウンターの中に入る。

僕は今、そう言ったはずだ。

そんな面倒なことを引き受ける人がすぐに見つかるでしょうか？

僕らが実験の結果を知る方法は、それ以外にないんだ。君が戻ってくるのは二十五年後なんだから。

（笠岡に）実験は必ず成功する。君は必ず無事に二十三年前に行ける。クロノスを信じろ。

信じてなかったら、ここには来ませんでしたよ。

お兄さんに会ったら、まず最初に何て言うんですか？

いろいろ考えたんだけど、まずは自己紹介から始めるべきだと思う。だって、兄が知ってる僕は、高校生だからね。僕の顔を見たら、お父さんと見

間違えるかもしれない。

一生懸命話せば、きっと信じてくれますよ。

倉敷さん、今日までありがとう。

どういたしまして。

次に会う時、君はおばあさんになってるんだな。

それが最後に言うセリフですか？

話が丸く収まったところで、実験開始だ。笠岡君、セルに入ってくれ。はい。それじゃ、行ってきます。

野方

吉本

吉本、データを読み上げろ。

目標時刻は一九九二年十月九日午前八時、目標地点は東京都調布市のマン

野方  
吉本  
倉敷

シヨン、メゾン飛田給の前。  
よし、カウントダウンだ。  
五、四、三、二、一。(キーを叩く)  
行ってらっしゃい、笠岡さん。

クロノス・ジョウンターが眩しく光り、轟音を発し、煙を吹き出す。煙の中から、笠岡が飛び出す。周囲を見回す。人の姿がいくつか見える。その人々はビデオを巻き戻したように、時間の流れとは逆に動いている。その中に、秋路の姿が見える。笠岡は秋路に歩み寄り、時間流れるが、他の人々が行く手を阻み、なかなか近づけない。そこへ、リンがやって来る。笠岡とリンがぶつかり、二人とも倒れる。他の人々が去る。フェンスが閉じる。

①一九九二年十月九日朝。東京都調布市、メゾン飛田給の前。  
笠岡とリンが倒れている。

笠岡

リン

笠岡

リン

笠岡

リン

笠岡

リン

（上半身を起こして）いったあ……。腰が……。（リンに気づいて）君、大丈夫か？（リンに歩み寄って）君！君！（目を開けて、上半身を起こす）君、今、僕とぶつかっただよな？怪我はしてないか？どこか、痛い所はないか？（額の傷に気づいて）あ、それ、血じゃないか？（手を伸ばす）（笠岡の手を叩いて）触らないで！（手を押さえて）いったあ……。おかしなことをしたら、警察を呼ぶよ。君、今、いくつだ。まだ小学生だろう。生意気な口をきいてないで、おでこを見せてみる。おじさんの方こそ、偉そう口きかないですよ。いきなり私に押し倒したくせに。わざとじゃない。ここに着いたら、たまたま君がただけで……。やばい。（パーソナル・ボグのスイッチを押す）

笠岡リン 笠岡リン 笠岡リン 笠岡リン 笠岡リン 笠岡リン 笠岡リン 笠岡リン 笠岡リン 笠岡リン

何それ？  
何でもない。

それ、時計じゃないよね？ もしかしてカメラ？ 私のこと、写真に撮った？ その写真、何に使うつもり？（呻いて、額を押さえる）

痛むのか？  
ちよつとだけ。

病院へ行こう。頭の怪我は後が怖い。念のために、詳しく検査してもらおうんだ。

検査なんか必要ない。私、もう行くね。（立ち上がるが、すぐによるめいて、ひざまずく）

ほら、見ろ。やっぱり病院へ行った方がいい。

今のはただの立ち眩み。もう私に話しかけないで。

（ハンカチを差し出して）ほら。

何？

これで傷を押さえた方がいい。まだ血が出てる。

ハンカチなら自分で持つてる。（ハンカチを出して、おでこに当てる）

せめて傷を消毒して、絆創膏を貼らないか？ 僕の知り合いがこのマンションに住んでるんだ。

そう言つて、私をマンションの一室に連れ込んで――

それ以上、人を変質者扱いするのはやめろ。ところで、君に一つ聞きたいことがある。今日は何日だ。

えーと……

一九九二年の十月九日か？



リン  
笠岡

そう。でも、どうしてそんなこと聞くの？  
「僕はその子連れて、メゾン飛田給に入りました。エレベーターで三階へ。エレベーターの前でその子を待たせて、三〇三号室に向かいました」

②メゾン飛田給の廊下、秋路の部屋の前。  
笠岡がボタンを押す。

リン  
笠岡

誰のウチ？  
どうしてついてくるんだ。相手に事情を説明したら、すぐに呼ぶ。それまで向こうで待ってろ。

リン  
笠岡

返事がないね。  
おかしいな。この時間なら、まだ家にいると思ったんだけど。

笠岡がボタンを押す。

リン  
笠岡  
リン  
笠岡

もう出かけちゃったんだよ。諦めたら？  
いいから、君は向こうに行ってる。  
はーい。(と笠岡から離れる)  
(ドアを叩いて) すみません。笠岡さん。いらっしゃったら、ドアを開けてください。

ドアが開いて、秋路が顔を出す。パジャマを着ている。

笠岡 秋路  
笠岡 秋路

笠岡 秋路  
笠岡 秋路

笠岡 秋路

笠岡 秋路

笠岡 秋路

うるせえなあ。一回鳴らして、返事がなかったら、諦めろよ。  
久しぶり。僕が誰か、わかる？

：：お父さん？

予想通りの反応だ。僕の顔を見たら、最初にそう言うんじゃないかと思ってたんだ。自分でも最近似てきたと思うし。でも、お父さんは一九九二年の時点で、五十歳。僕はそこまで老けてないよ。

じゃ、親戚の方ですか？ 父の従弟とか？

違うよ。僕は光春。弟の光春だよ。

は？

いきなりこんなことを言われても、すぐには信じられないよね？ でも、

僕は本当に光春なんだ。

光春は今年で十六です。あなたみたいな中年じゃない。

でも、二十三年後にはこうなるんだ。いいかい、お兄さん。僕は二十三年

後の二〇一五年から来たんだ。お兄さんに会うために。

下らない冗談はやめてください。

そうそう。まずは冗談だと決めつける。それも予想通りの反応だよ。だから、ここに証拠を持ってきた。(リュックの中から紙袋を取り出して)こ

れ、僕の免許証。笠岡光春。写真は僕の顔だろう？ この部分に注目。

「交付／平成二十七年二月」。先月更新してきたんだ。

こんなものは簡単に――

偽造できるって言いたいんだろう？

だつたら、今度はパスポート。こつ

ちは去年更新したから、日付は二〇一四年のオーガスト。これでもまだ信

じられない？

笠 秋  
岡 路

笠 秋  
岡 路

笠 秋  
岡 路

笠 秋  
岡 路

笠 秋  
岡 路

笠 秋  
岡 路

笠 秋  
岡 路

笠 秋  
岡 路

笠 秋  
岡 路

笠 秋  
岡 路

信じられるわけないでしょう。

じゃ、これは？ 今朝の読振新聞。平成二十七年三月三十日。一面だけじゃくて、中身も全部、平成二十七年。これでもまだ偽造だって言い張る？

よくもまあ、ここまで手の込んだことを。さすがはお兄さん。予想以上にしぶといね。

（新聞を見て）でも、これ、偽物にはしてはよくできてるね。君は向こうに行ってる。

お子さんですか？  
まさか。この子は赤の他人だよ。ついさつき、このマンションの前で会ったんだ。

それで、僕に何の用です。  
だから、会いに来たんだよ、お兄さんに。あと、別にもう一つ、用がある。

もう一つ？  
（リンを示して）この子の手当てをさせてほしい。僕が怪我をさせちゃつ

たんだ。  
怪我してるんですか？

僕は病院へ行った方がいいって言ったんだけど。  
私は病院が〇〇の次に嫌いな。

（秋路に）仕方ないから、ここに連れてきたんだ。消毒薬や絆創膏があるんじゃないかと思って。

とりあえず、中へどうぞ。  
「僕らは兄の後について、部屋の中に入りました。部屋は男の独り暮らし

とは思えないけど、キレイに片づいていました」

秋路・笠岡・リンが部屋の中に入る。

秋路 えーと、葉箱はどこだったかな。

笠岡 自分の家なのに、わからないの？

秋路 薬は滅多に飲まないんですよ。僕は体が丈夫なんで。

笠岡 心臓は？

秋路 心臓？

笠岡 ほら、ウチのおじいちゃんには心筋梗塞で亡くなったじゃないか。笠岡家の

人間は代々、心臓が強くないんだ。お兄さんはどう？ 動悸とか息切れと

秋路 かしい？

笠岡 いいえ、全然。

秋路 本当に？ よく考えてよ、お兄さん。

笠岡 わかった。キッチンの茶箆筒の上だ。取ってきます。

秋路が去る。

リン おじさん、本当に未来から来たの？

笠岡 そうだよ。どうせ君も信じないだろう？

リン 信じる信じる。で、本当の狙いは何？ お金？ あの人、実は大金持ちの

笠岡 息子なの？

笠岡 普通の大学院生だよ。それから、僕のこと、おじさんと呼ぶのはやめてく

笠岡 れないか。

秋路が戻ってくる。手には薬箱。

秋路

あつたあつた。(薬箱を差し出す)

笠岡

(受け取って) ありがとう、お兄さん。

秋路

失礼ですけど、僕のこと、お兄さんて呼ぶのはやめてくれませんか？

笠岡

やっぱりまだ信じてないんだね。

秋路

百歩譲って、あなたが光春だったとしましょう。でも、今のあなたは僕よ

り

はるかに年上です。

笠岡

今年で三十九になったよ。

秋路

ほら、十六も年上だ。そんな人にお兄さんて呼ばれるのは、どうにも気持ち

笠岡

が悪い。

リン

そう？ 僕は全然、違和感ないけど。

笠岡

私は違和感ありまくり。

秋路

君の意見は聞いてない。

笠岡

どうか本当のことを言ってください。あなたは弟じゃなくて、親戚なんで

秋路

でしょう？ ここへ来たのは、父に頼まれたからなんでしょう？ 僕の様子

笠岡

を探ってくれって。

秋路

どういうこと？

笠岡

父には僕から話します。いつかは話をしなきゃと思ってたんです。

秋路

話って？

笠岡

お茶を淹れてきます。(リンに) 君はジュースでいいよね？

リン

紅茶がいい。茶葉はダーズリン。レモンのスライスもつけてね。

笠岡

子供のくせに贅沢を言うな。

秋路が去る。笠岡がリンの手当てを始める。

笠岡

ほら、おでこを出して。

リン

はい。(ハンカチを取る)

笠岡

ちよつと染みるけど、我慢しろよ。(リンのおでこに消毒薬を吹きかける)

リン

(呻く)

笠岡

傷口は一センチ程度だ。これなら、もし跡が残っても、目立たないよ。悪

リン

かったね。

笠岡

私、傷が見てみたい。鏡はない？

リン

この部屋にはないな。

笠岡

洗面所に行けば、あるよね？ 私、行ってくる。

リンが去る。

①二〇一五年三月一日夕。神奈川県横浜市、P・フレックの会議室。  
吉本がやってくる。手にはファイル。

吉本

急に呼び出して、済まなかったな。実は君に折入って頼みたいことがあつてね。

笠岡

頼みたいこと？

吉本

その前にいくつか確認させてくれ。(ファイルを開いて) 君は鳥取の出身だったな？

笠岡

鳥取県鳥取市です。父は農家で、二十世紀梨を作っています。

吉本

兄弟は？

笠岡

上に兄が一人います。地元の大学を出て、今は父の仕事を手伝っています。

吉本

お兄さんが跡を継いで、笠岡家の未来は安泰というわけだ。

笠岡

おかげさまで。強いて問題があるとすれば、東京へ行った弟でしようね。

吉本

大学に入る時は「ノーベル賞を獲るんだ」って息巻いてたくせに、いまだ

吉本

にろくな仕事をしてない。

笠岡

君は我が社を否定するのか？

吉本

とんでもない。P・フレックは立派な会社です。入社させていただいで、

笠岡

心から感謝しています。

吉本  
笠岡

吉本

笠岡

吉本

笠岡

吉本

笠岡

吉本

笠岡

吉本

笠岡

吉本

笠岡

吉本

笠岡

吉本  
笠岡

君が我が社に入社したのは、四年前だったな。その前は、ハリマ電気の研究所にいました。そこをリストラされて、路頭に迷っていたところを、こちらに拾っていただいたんです。

ハリマで九年、我が社で四年。研究一筋でやってきたわけだ。

僕には他に取り柄がありませんから。

しかし、君が自分で認める通り、これと言った成果は挙げていない。

仰る通りです。でも、僕は常にベストを尽くしてきました。

本当にそう言い切れるかな？

どういうことですか？

確かに君は入社以来、無遅刻無欠勤。仕事にもまじめに取り組んでいる。

が、時々、君のそばを通ると匂うんだ。酒の匂いが。

僕は会社で飲酒したことはありません。

当たり前だ。しかし、二日酔いの状態で出勤したことは、二度や三度じゃないはずだ。入社した頃の君はそうじゃなかった。酒の量が増えたのは、

三年前。奥さんと離婚してからだ。

それは課長には関係ないことです。

正直に言いたまえ。今の君はアルコール中毒に近い状態じゃないのか？

課長の方こそ、正直に言ってください。僕はクビですか？

クビ？

今の僕は研究者として、何の役にも立っていない。だから、辞めろって言うんでしよう？

違う。君は完全に誤解している。

ごまかすのはやめてください。いきなり会議室に呼び出して、アル中って



吉本  
笠岡  
吉本

決めつけて、他に何の理由があるんです。  
僕は最初にこう言ったはずだ。君に頼みたいことがあると。  
それがクビじゃないとしたら、何だって言うんです。

笠岡君、僕は君という人間を高く評価している。確かに他社が驚くような新製品は開発していない。が、任せた仕事は確実にこなす。研究者として、君ほど信頼できる人間はいない。ところが、非常に残念なことに、君は運が悪い。前の会社を追い出され、奥さんに逃げられた。アルコール中毒になるのもよくわかる。

笠岡  
吉本

課長、念のために言うておきますが、僕はアル中ではありません。  
君は人生に区切りをつけるべきだ。そして、一からやり直すべきだ。  
子会社に行けつて言うんですか？ それとも、地方の工場へ？

笠岡  
吉本

過去へ？  
過去へ行くんだ。  
時間を遡るんだ。クロノス・ジョウンターに乗って。

② 夜。倉庫。  
野方がやってくる。

野方  
吉本

ようこそ、野方秘密研究所へ。  
(笠岡に) 開発三課の野方課長だ。廊下で何度か擦れ違ってるんじゃないか？

笠岡

トイレで隣に並んだこともあります。(野方に) 笠岡です。よろしくお願  
いします。

野方

最初に言っておくが、ここで見たこと、聞いたことは一切秘密だ。会社の人間はもちろん、家族にも絶対に漏らすな。

笠岡

だから、秘密研究所なんですか？

吉本

クロノスはここに資料として保管されている。勝手に動かしていることが

野方

バレたら、野方さんはクビだ。

笠岡

おまえもだ、吉本。(笠岡に)それで、クロノスの話は吉本から聞いたか。

野方

少しだけ。物質を過去に飛ばす機械だそうですね。

笠岡

驚いたか。

野方

最初は信じられませんでした。それが本当なら、世界的なニュースになっているはずだ。

野方

俺も本当はそうしたかったんだが。まあ、まずは実物を見せてやろう。これがクロノス・ジョウンターだ。

野方がテーブルの上のノート・パソコンのキーを叩く。フェンスが開いて、奥のクロノス・ジョウンターが姿を現す。

笠岡

予想より大きいですね。これなら人間だって楽に飛ばせそうだ。

野方

実際、既に五人飛ばした。最短が十分前。最長が十九年前。

笠岡

そのすべてが成功したんですか？

野方

もちろんだ。五人とも、目標の時代に到達した。

吉本

(笠岡に)ただし、クロノスには欠点がある。過去へ飛ばすことはできて

も、その時代に止まらせることはできないんだ。過去に到着した人間は、すぐに未来へ弾き飛ばされてしまう。それも、元の時代じゃなくて、遠い

野方

笠岡  
野方

笠岡  
野方  
吉本

笠岡  
野方

笠岡  
野方  
笠岡  
野方

未来へ。

(笠岡に)そこで開発したのが、このパーソナル・ボグだ。(装置を差し出して)これを装着していけば、最大で九十時間、過去に止まることのできる。そして、これをさらに改良したのが、このパーソナル・ボグロ。

(装置を差し出す)

見た目はあまり変わりませんが。

しかし、パワーは格段に違う。滞在時間は百二十時間、有効範囲も半径一メートルまで伸びた。

でも、結局は遠い未来へ弾き飛ばされるんですよね？

まじめなわりに、ずけずけ物を言う男だな。

しかし、笠岡君の指摘は正しい。(笠岡に)クロノスの開発が中止になったのは、この欠点が克服できなかったからなんだ。野方さんはここで開発を続けたが、いまだに解決法が見つからない。そして、ついにゴールが来た。

ゴール？

先週、社長から内示があった。俺は来月の四月一日、開発部の部長に就任する。

昇進ですね？ おめでとうございます。

非常にうれしい。が、同時に非常に悲しい。部長になったら、こんな所に  
来る暇はない。クロノスの開発は今月いっぱい終わらせるしかないんだ。  
それは非常に残念ですね。

だから、君に来てもらったんだ。俺は最後にもう一度だけ、クロノスを動か  
かしたい。人間を過去に飛ばしたいんだ。

吉本

笠岡

吉本

笠岡

吉本

笠岡

野方

笠岡

吉本

笠岡

野方

笠岡

吉本

笠岡

吉本

笠岡

（笠岡に）とは言っても、君に行つてほしいのはそれほど遠い過去じゃない。今から五年前だ。

それだけ？

今回の実験は、新型ボグの効果を実証すること。君にはできるだけ長く過去に止まつてほしい。

五年前に行くのと、何年先に弾き飛ばされるんですか？

野方さんの計算によれば、十六年後。つまり、今から十一年後だ。

十一年も経つたら、世の中はすっかり変わつてるでしょうね。

未来に弾き飛ばされるのはイヤか。

正直言つて、あまり気が進みません。でも、過去に行くことには魅力を感じる。

ただし、僕が行きたいのは二十三年前ですが。

待て待て。そんな昔に行つたら、何十年も先に弾き飛ばされるぞ。

そうでしようね。でも、僕にはどうしても会いたい人がいるんです。

それは誰だ。

僕にはもう一人、兄がいたんです。僕の七つ上で、大学院で物理を研究して

いました。僕がこの道に進んだのは、兄の跡を継ごうと思つたからなんです。

その人は二十三年前に亡くなつたのか。

ええ。僕にとつて、兄は憧れの人でした。兄は東京の大学に入る時、家を

出たんですが、毎年一度だけ、正月に帰省したんです。そのたびに東京の

こと、大学のこと、物理の最新の学説を聞かせてくれました。いつかは日

本を代表する科学者になる。そう信じていました。でも、二十三年前の十

一月に急死したんです。

野方  
笠岡

だから、二十三年前に行つて、お兄さんを助けようと言うのか。それは不可能です。兄の死因は重度の心筋梗塞。心破裂を起こして、ほとんど即死だったそうです。たとえ医者連れていっても、助けることはできません。

野方  
笠岡

だったら、なぜ会いに行きたいんだ。僕は兄に報告したいんです。「お兄さんの跡を継いで、科学者になったよ」

吉本

つて。そうすれば、兄はきつと喜んでくれると思います。それで自分の人生に区切りをつけようというわけか。野方さん、彼を二十

笠岡  
野方

三年前に行かせてやりましょう。ちよつと待ってください。僕はまだ「行く」とは言つてませんよ。

笠岡  
野方

何だよ。今、完全に「行きます」って言う雰囲気だったぞ。そんなに簡単に決められませんよ。僕にだって、いろいろ考えなきゃいけないことがある。

吉本  
笠岡

奥さんのことがまだ諦められないのか？

野方  
笠岡

離婚したのは三年も前です。心の整理はとつくについてます。じゃ、何が問題なんだ。

笠岡

それは秘密です。僕に一週間、時間をください。行くか行かないかは、一週間後にお答えします。

野方・吉本が去る。フェンスが閉じる。

一九九二年十月九日朝。秋路の部屋。  
リンがやってくる。手には雑誌。

リン (雑誌を差し出して) ねえ、見て。洗面所にこんなものがあつたよ。  
笠岡 人の家のものを勝手に触るな。こっちに来て、おでこを出して。

リン これ、女の人が読む雑誌だよね？ あの人、もしかして、オカマ？

笠岡 僕が知る限り、そういう気配はなかった。(絆創膏を貼る)

リン じゃ、彼女が遊びに来て、忘れていったのかな。

笠岡 恋人がいるって話も聞かなかったけど。まあ、お兄さんは頭もいいし、顔

リン もいい。ガールフレンドが一人や二人いても、おかしくないな。

笠岡 おじさんとは大違いだね。

リン 友達にもよく言われたよ。もつとお兄さんに似ればよかつたのにつて。

笠岡 ということは、あのパジャマは彼女のプレゼント？

笠岡 そうだと思う。あんなもの、お兄さんが自分で買うわけない。

そこへ、秋路がやってくる。手にはカップを載せたお盆。洋服に着替えている。

秋路 お待たせしました。

笠岡 秋路 ありがとうございます。着替えてきたの？  
笠岡 秋路 午後から出かけるんで。本当はもう少し寝てるつもりだったんだけど。  
笠岡 秋路 悪かったね。朝早くから押しかけて。

(紅茶を飲む)

笠岡 リン いただきますは？  
笠岡 リン いただいてます。

笠岡 リン (笠岡に)それを飲んだら、帰ってくれませんか。怪我の手当てはもう終わったんですよね？

笠岡 秋路 でも、お兄さんはまだ信じてないだろう？ 僕が光春だって。  
笠岡 秋路 ええ、まあ。

笠岡 秋路 もう一度よく考えてみてくれないかな。僕がお父さんの徒弟か何かだとしたら、なぜ本名を名乗らない？ 弟のフリをする必要なんかどこにもないじゃないか。

笠岡 秋路 正常な頭を持った人間なら、そんなことはしないでしょね。

笠岡 秋路 それはつまり、僕の頭が正常じゃないって言いたいわけ？

笠岡 秋路 僕は大学院で物理学を研究しています。時間遡行が不可能なことは、物理学の常識です。

笠岡 秋路 それは一九九二年での話だろう？ 僕は今、P・フレックって会社でアンドロイドの開発をしている。このアンドロイドは人間と同じように話したり動いたりできる。これから二十三年の間は、科学は飛躍的に進歩するんだ。じゃ、あなたがいた時代では、人間は空を飛べるようになりましたか？

笠岡 リン それとこれとは話が別だよね。  
笠岡 リン たまにはいいことを言うじゃないか。仕方ない。次の証拠を見てもらおう。

秋路 笠岡 秋路  
（リュックの中からタブレットを取り出して）これ、僕のタブレット。  
タブレット？  
僕の時代のコンピュータ。この中に、僕の写真を全部入れてきた。これ  
を見れば、十六歳の僕が今の僕になったって納得できる。ほら。  
（タブレットを見て）凄い。写真が横にスライドしていく。

そこへ、絵子がやってくる。

絵子 秋路 絵子  
ただいま、秋ちゃん。（笠岡・リンを示して）お客さん？  
まあね。でも、もう帰るところだから、気にしないで。

絵子 秋路 絵子  
そういうわけには行かないよ。こうして顔を合わせちゃったんだから、き  
ちんとご挨拶をしないと。（笠岡に）初めまして。玉野絵子です。

笠岡 秋路 笠岡 絵子  
初めまして。笠岡光春です。  
笠岡さん？ てことは、秋ちゃんの親戚？

笠岡 秋路 笠岡 絵子  
いいえ、弟です。  
弟？ お父さんの？

笠岡 秋路 笠岡 絵子  
詳しいことは後で説明する。（笠岡に）悪いけど、今日はこれで帰って  
来ませんか？

笠岡 秋路 笠岡 絵子  
その前に教えてほしい。この人はお兄さんとどういう関係？  
お兄さん？

笠岡 秋路 笠岡 絵子  
僕は笠岡家の長男じゃないか。だから、親戚の人たちはみんな僕のことを  
「お兄さん」て呼ぶんだよ。

リン  
どうして嘘をつくの？





秋路 笠岡 秋路 笠岡 秋路 笠岡 秋路 笠岡 秋路 笠岡 秋路 笠岡 秋路 笠岡

それだけじゃ足りないんですよ。お芝居をやるにはお金がかかるから。絵子ちゃん、頼むから、向こうの部屋へ行ってくれないか。

話はまだ終わってない。(絵子に) あなた、今、「お芝居をやる」って言いましたか？

嘘。秋ちゃん、そのことも話してなかったの？ 劇団に入ってることも？

「劇団に入ってる」？

絵子ちゃん、君が口を開けば開くほど、僕はまずい立場に追い込まれていく。

ごめんね、秋ちゃん。(笠岡に) 私、昨夜は仕事で一睡もしてないんです。

もう寝させてください。

えー？ 私はもつと話が聞きたい。

(絵子に) 僕もこの子と同感です。話はいよいよ佳境に差しかけたところだ。ぜひとも続きを聞かせてください。

もう、いい。後は僕が全部話します。

その言葉を待ってたよ。僕もお兄さんの口から聞きたかった。

僕は今、ある劇団で役者をやっています。大学一年の時、友達に誘われて、その劇団の公演を見に行つて、それがとてもなくおもしろい芝居で、自分もあの人たちと同じ舞台に立ちたいと思つて、次の年のオーディションを受けて、あっさり落ちて、また次の年も受けて、今度は受かつて。

大学は？ 劇団なんかに入つて、授業に出る暇はあったの？

何とか両立させようと思つただけ、公演中は全然出られなくて。

まさか、辞めたの？

籍は残ってます。今年も卒業できそうにないけど。

笠岡 秋路

笠岡

秋路 笠岡

絵子 笠岡 絵子

笠岡 リン 笠岡

秋路 笠岡 秋路

てことは、大学院に入ったっていうのも嘘なんだね？  
ウチの父は古い人間です。役者になりたいなんて言ったら、絶対反対するに決まってる。「何のために東京の大学へ行かせたんだ」って。だから、一人前になるまでは黙っていようと。

お父さんは喜んでたよ。お兄さんが大学院に入ったこと。「俺の息子が科学者になるとは思わなかった。秋路は笠岡家の誇りだ」って。僕だって、うれしかった。いつかは日本を代表する科学者になる。そう信じてた。それなのに、よりにもよって、芝居なんて。

くだらないですか、芝居は。  
そうは言わない。でも、お兄さんは頭がいい。その頭を、どうしてもっと役に立つことに使おうとしないんだ。

トミー・リー・ジョーンズはハーバード大学の出身ですよ。  
あなたは口出ししないでください。  
ヒュー・グラントはオックスフォード、エマ・トンプソンはケンブリッジ。  
優秀な頭脳を演技に役立てている人はいっぱいいます。

誰ですか、その人たちは？  
知らないの？ 三人とも有名な映画スターだよ。

何がスターだ。(絵子に) ハーバードまで行って、役者になるなんて、僕には才能の無駄遣いと思えませぬね。  
あなたは普段、芝居を見ますか？

いや、全然。  
そういう人に、いくら芝居の魅力を説明しても、わかってはもらえない。この話はこれでおしまいにしましょう。絵子ちゃん、お腹空いてない？



笠岡

「僕はリンを病院へ連れていくことにしました。絵子さんの話によると、歩いて十分ほどの所に、総合病院がある。そこへは、兄が道案内してくれることになりました。しかし、メゾン飛田給を出ると」

①一九九二年十月九日朝。メゾン飛田給の前。  
秋路・リンがやってくる。

リン  
笠岡

私、やっぱり病院には行きたくない。そういうわけには行かない。記憶を失くしたということは、頭が強い衝撃を受けたってことだ。血管が切れたり、骨にヒビが入ったりして、可能性がある。念のために、詳しく検査してもらった方がいい。それとも、何か病院に行きたくない理由があるのか？  
別に。

リン  
秋路  
笠岡

（笠岡に）あなたはこの子が嘘をついてると思ってるんですか？  
当然だろう？ 記憶喪失なんて、小説じゃあるまいし。

笠岡  
秋路

よくそんなことが言えますね。自分だって、時間遡行なんてバカげた話をしているくせに。  
僕の話は事実だよ。

リン 笠岡  
リン 笠岡  
秋路 笠岡  
笠岡 笠岡  
秋路 笠岡  
リン 笠岡  
笠岡 笠岡  
秋路 笠岡  
リン 笠岡  
笠岡 笠岡  
秋路 笠岡  
リン 笠岡  
笠岡 笠岡

私の話だって、事実だよ。どうして信じてくれないの？

「だって、今すぐ病院に行くんだ。お医者さんが診察して、「間違いない。この子は記憶喪失だ」って言ったら、信じてやる。」

いいよ、行くよ。でも、その前に、家に寄りたい。お父さんとお母さんが心配してると思うから。

でも、君は住所を覚えてないんだろう？

（笠岡に）私はどっちの方向から歩いてきたの？

たぶん、あっちだったと思うけど。（指差す）

じゃ、あっちを探す。

そっちは病院とは逆の方向だ。僕は午後から用事がある。あんまり時間がないんだよ。

用事って、芝居の練習？

明日から公演が始まるんです。昨日小屋入りをして、今日は場当たり。あ、場当たりっていうのは、舞台を使って、場面ごとにやる稽古のことです。

だったら、もう行っていいよ。私は一人で大丈夫だから。

そう言っつて、逃げるつもりか？

違うよ。

大体、記憶がないのに、どうやって探すんだ。「私の家はここですか？」って、一軒一軒聞いて回るのか？

自分の家を見たら、記憶が蘇るかもしれない。それに。（ポケットから鍵を取り出す）

その鍵は？

ポケットに入ってた。この鍵が合う家が、私の家なのよ。

笠岡

「僕はリンの言葉に従うことにしました。記憶喪失なんて、嘘に決まってる。病院に行くより、家に帰した方がいいと思っただけです。一時間ほど歩き回って、リンは一軒の家の前で止まりました」

②リンの家の前。

秋路

(リンに) この家に、見覚えがあるの？  
何となく。

笠岡

バカでかい家だな。家って言うより、屋敷って感じだ。君のお父さんは社長さんだったのか？

秋路

表札には「赤磐」って書いてある。(リンに) この名前に見覚えは？  
わからない。でも、この家は前にも見た気がする。

リン

それだけじゃ、君の家かどうか、わからないだろう。この家の前を通るたびに「こんな家に住みたいな」って思ってた。それで記憶に残ってるんじゃないか？

笠岡

まあ、いい。(リンに) チャイムを押してみろよ。  
(ボタンを押す)

リン

返事がないな。

秋路

これだけ大きいと、玄関まで来るのに、時間がかかるんじゃないですか？  
(ドアの鍵穴に鍵を差す)

リン

こら、知らない人の家だったら、どうするんだ。  
(鍵を回して、ドアを開く)

笠岡

開いた。

秋路  
リン  
（リンに）驚いたな。本当に君の家だったんだ。  
（中に向かつて）お父さん！ お母さん！

リンが家の中に入る。後を追って、笠岡・秋路が家の中に入る。

笠岡  
秋路  
笠岡  
待てよ。どこへ行くんだ？  
（リンに）何か思い出したのか？ 黙ってないで、返事をしろよ。  
「リンは一階の部屋を一つ一つ見て回りました。でも、人の姿はどこにもなし。すると、リンは二階へ向かいました。僕も後を追おうとすると」

リンが二階へ行く。

秋路  
笠岡  
秋路  
笠岡  
おじさん、ちょっと待ってください。  
今、僕のこと、おじさんと呼んだね？  
すみません、つい。  
リンがそう呼ぶのは仕方ない。あの子から見れば、僕は間違いなくおじさんだし。  
いや、僕から見ても、あなたはおじさんですよ。  
見た目はそうかもしれないけど、お兄さんからはそう呼ばれたくない。  
じゃ、何て呼べばいいんです。  
名前でもいいよ。光春で。  
じゃ、光春さん。この家、ちょっとおかしくありませんか？  
おかしいうって、何が？



秋路

笠岡

秋路

笠岡

秋路

笠岡が二階へ行く。

人が住んでる気配がしないんですよ。テーブルや椅子には埃が積もってるし、電化製品の電源は全部落ちてる。長い間、留守にしたのかな？ たとえば、父親が海外に転勤になって、家族みんなでついていったとか。だったら、どうしてリンちゃんだけ帰ってきたんです。一緒に帰ってきたけど、途中ではぐれたとか。それはないか。そう言えば、リンちゃんは何？ 二階に行った。お兄さんはここで待っていて。様子を見てくるから。「二階にもたたくさんの部屋がありました。一番手前の部屋に入ると、そこにリンが立っていました」

笠岡

リン

笠岡

リン

笠岡

ここは君の部屋だね？  
……

この人は映画スター？  
トム・クルーズ。

その名前は聞いたことがあるな。僕は映画はあまり見ないんだけど、確か『ミッシェル・インポッシブル』だったかな。

何それ？ これは『トップ・ガン』だよ。  
そうか。『ミッシェル・インポッシブル』はまだ作られてないんだな。

まだ続けるの？ その嘘。  
僕は嘘はついてない。本当に二十三年後の世界から来たんだ。で、君の方

笠岡 リン  
笠岡 リン

笠岡 リン  
笠岡 リン

一階に赤磐がやってくる。

赤磐 秋路  
赤磐 秋路  
赤磐 秋路  
赤磐 秋路

は？  
私？

君はまだ続けるのか？ 記憶喪失のフリ。

私だって、フリなんかしてない。

君は初めからここに来るつもりだった。でも、それを他の人に知られたく

なかつた。だから、記憶喪失のフリをして、リッテ偽名を名乗った。病院

に行きたがらなかつたのは、本名がバレるからだ。

私はリンだよ。偽名じゃない。

名前だけは本当だったのか。でも、それ以外は全部嘘だろう？

……

教えてくれよ。君はどこから来たんだ。君のお父さんとお母さんはどこに

いるんだ。

(秋路に)おまえ、ここで何をしてる。

この家の方ですか？ 僕はこの近くに住んでいる、笠岡と言いました。

どうやって鍵を開けた。ピッキングか？

ピッキングって？

惚けるな。近頃の空き巣はピッキングをして、玄関から堂々と入るって聞

いたぞ。

僕は空き巣じゃない。どうか落ち着いて、話を聞いてください。

言い訳は警察でしろ。(秋路をつかむ)



事実で。  
おまえ、リンに怪我をさせたのか？

赤磐が笠岡につかみかかる。そこへ、リンがやってくる。

秋路  
リンちゃん！

笠岡  
(リンに)君の口から説明してくれ。僕たちのこと。

赤磐  
(リンに)大丈夫か、リン！

リンが家の外に飛び出す。

笠岡  
リン！

後を追って、笠岡が家の外に飛び出し、リンの腕をつかむ。

笠岡  
なぜ逃げる。あの人は君のお父さんじゃないのか？

リン  
違う。

笠岡  
中に戻れ。僕らのことをあの人に説明するんだ。

リン  
イヤだ。

リンが笠岡を突き飛ばして、走り出す。が、すぐに転ぶ。

笠岡  
リン！「そこへトラックが走ってきました。僕はリンに駆け寄りました。

が、もう避けられない。僕は思わず、パーソナル・ボグロのボタンを押し  
ました」

車の急ブレーキの音。

赤磐

今の音は？

秋路

事故でしょうか。

赤磐

まさかリンが。リン！　リン！

赤磐が走り去る。秋路が後を追って、走り去る。

二〇一五年三月七日 昼。P・フレックの屋上。  
倉敷がやってくる。

6

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

（笠岡に）ごめんなさい。待たせました？

いや、全然。お昼ごはんは？

済ませてきました。社員食堂でカツカレーを。

昼間から凄い食欲だな。

そのかわり、夜は控え目にする。そうすると太らないですよ。笠岡さん

はまたお昼抜きですか、二日酔いで。

違う。この一週間、一滴も飲んでない。

本当ですか？（笠岡の体の匂いを嗅いで）確かに、お酒の匂いはしないで

すね。

実は先週、課長に注意されてね。いい機会だから、やめることにした。

その方がいいですよ。たしなむ程度ならともかく、笠岡さんは明らかに飲

み過ぎです。ここで飲んでるのを見た時は、ビックリしました。

それは三年も前の話じゃないか。

笠岡さんたら、いきなり私の顔を睨みつけて、「課長に告げ口したければ、

すればいい」って。

笠岡 倉敷 笠岡 倉敷 笠岡 倉敷 笠岡 倉敷 笠岡 倉敷 笠岡 倉敷 笠岡 倉敷

君だって、凄い目つきで睨み返してきて、僕からウイスキーの瓶を取り上げて、中身を捨てた。あの時は本当に怖かった。昼休みに屋上でお酒を飲むなんて、最低の男だと思っただけです。おかげで、自分のバカさ加減に気づかされた。会社で飲んだのは、あの日が最後だ。

でも、会社の外では飲み続けたんですよね。で、話って何ですか？君にちよっと相談したいことがあって。さっき、課長に酒を注意されたって言っただろう？ 実はその時、海外赴任を打診されたんだ。

行き先は？

事情があつて、口外できない。出発は今月の末。帰国は今のところ未定。未定って言つても、大体の長さは決まつてるんでしよう？ 三年とか五年とか。

いや、そんな短い期間じゃない。下手をすると、二十年以上。しかも、途中で帰国はできない。

そんな。お盆もお正月も帰ってこられないんですか？

行き先がちよつと変わった所なんだよ。でも、そこに行く意義は十分にあり。僕が携わるのは、きわめて革新的な研究なんだ。

もしかして、その研究には三課の野方さんが関わってますか？

ああ。でも、どうしてそのことを？

笠岡さんがウチの会社に入ったのは四年前ですよ？ だから、知らないと思いませんけど、以前ウチの課には、吹原さんと布川さんという人がいたんです。その二人も野方さんの研究に参加して、姿を消したんです。行方不明になつたつてこと？

倉敷

笠岡  
倉敷

笠岡  
倉敷

笠岡  
倉敷  
笠岡

倉敷  
笠岡

倉敷  
笠岡

警察沙汰にはなっていないので、ご家族は行き先をご存じなんだと思います。笠岡さん、これはチャンスですよ。

チャンスって？

吹原さんも布川さんも、とても優秀な研究者でした。だから、野方さんに選ばれたんですよ。今頃は海外で最先端の研究をしているはずですよ。そのうち、画期的な論文を発表して、ニュースになるんじゃないかな。

君は僕も参加した方がいいって言うんだね？

少なくとも、ウチの会社でダラダラやっているよりはいいんじゃないですか？

ダラダラはひどいな。

だって、ずっと酒浸りじゃないですか。奥さんと離婚してから。

違うんだよ、倉敷さん。離婚は関係ないんだ。僕は自分自身に腹が立つてるんだ。

自分自身に？

僕は十六の時に、科学者になろうと決めた。それから、一心不乱に勉強してきた。大学は第一志望に入れた。大学院にも進めた。就職先も、自分の思い通りの研究ができる場所だった。何もかも順風満帆だったんだ。三十になるまで。

三十歳の時、何かあったんですか？

何もないよ。何もないことが問題だったんだ。知ってるかい？ ノーベル賞を受賞するのは大抵老人だけど、賞が贈られるのは、その人が三十歳前後に行った研究に対してなんだ。世界の歴史を変えるような発見は、若いうちにしかできないんだ。



倉敷 笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷 笠岡

それは私も知ってます。

僕は焦った。さらにガムシヤラに研究をした。それなのに、会社を追い出され、妻は去っていった。そして、僕は三十九になった。三十九になったのに、いまだに何も成し遂げてない。人に胸を張れるような研究を、何もしていない。

笠岡さんは理想が高すぎるんじゃないですか？ 賞が獲れるのはほんの一握りの人たちです。それ以外にも、立派な研究をしている人はいっぱいいます。

野方さんもそのうちの一人なんだろうな。話を聞いて、ぜひとも協力したいと思った。

だったら、答えは決まってるじゃないですか。海外赴任は引き受けるべきです。

ただ一つだけ、心残りがあってね。それで君に相談しようと思ったんだ。心残りって？

ストレートに聞くよ。倉敷さん、君は今、誰かと付き合ってる？ 本当にストレートな質問ですね。じゃ、ストレートにお答えします。私には婚約者がいます。

そうなの？

とつても優しい人ですよ。でも、今、仕事が忙しくて。それが落ち着くまで、式の予定が立てられないので、他の人には秘密にしてるんです。

わかった。海外赴任を引き受けることにする。

それで、笠岡さんはどこへ行くんですか？

だから、それは部外者には口外できないんだよ。

倉敷 じゃ、笠岡さんから野方さんに伝えてください。私もお手伝いしたいって。  
笠岡 倉敷さんが？ どうして？  
倉敷 笠岡さんの話を聞いて、俄然、興味が湧いてきたんですよ。私だって一応、  
研究者ですから。

②二〇一五年三月三十日朝。倉庫。  
野方・吉本がやってくる。

野方 あれ？ お邪魔だったかな？  
笠岡 おかしなことを言わないでください。僕と倉敷さんはそういう関係じゃあ  
りません。

野方 知ってる。正面攻撃をして、見事に玉砕したんだろう。

笠岡 その話は誰から？ ウチの課長からですか？

吉本 僕は何も言っていない。

野方 (笠岡に) おかげで、君は過去に行く決心をした。倉敷君には心から感謝  
している。

吉本 野方さん、彼は心の傷を癒すために行くんじゃない。お兄さんに会うため  
に行くんです。

野方 怒るな、吉本。俺は実験前の緊張をほぐそうとしただけだ。

吉本 おかげでさまで、十分ほぐれました。そろそろ実験を開始しましょう。

野方 オーケイ。倉敷君、君がここに来るのは初めてだったな？ 前にクロノス  
を見たことは？

倉敷 過去の実験は動画で見ましたけど、実物はまだです。

野方

だったら、見せてやろう。これがクロノス・ジョウンターだ。

野方がテーブルの上のノート・パソコンのキーを叩く。フェンスが開いて、奥のクロノス・ジョウンターが姿を現す。

倉敷

凄い。動画で見た時より、ずっと迫力がありません。

吉本

笠岡君、準備はいいか？

笠岡

はい、いつでも出発できます。(リュックを背負って) 倉敷さん、今日ま

倉敷

でありがとう。

笠岡

どういたしまして。

倉敷

次に会う時、君はおばあさんになってるんだな。

野方

それが最後に言うセリフですか？

笠岡

話が丸く収まったところで、実験開始だ。笠岡君、セルに入ってくれ。

野方

はい。それじゃ、行ってきます。

笠岡がクロノス・ジョウンターの中に入る。

野方

吉本、データを読み上げろ。

吉本

目標時刻は一九九二年十月九日午前八時、目標地点は東京都調布市のマン

野方

ション、メゾン飛田給の前。

吉本

よし、カウントダウンだ。

倉敷

五、四、三、二、一。(キーを叩く)

倉敷

行ってらっしゃい、笠岡さん。

クロノス・ジョウンターが眩しく光り、轟音を発し、煙を吹き出す。煙の中から、笠岡か飛び出す。周囲を見回す。人の姿がいくつか見える。その人々はビデオを早送りしたように、時間の流れより速く動いている。そこへ、リンがやってきて、転ぶ。笠岡がリンに駆け寄り、パーソナル・ボグロのボタンを押す。さらにもう一度押す。他の人々が去る。フエンスが閉じる。

①一九九二年十月九日夕。リンの家の前。

笠岡

「僕はすぐにもう一度、ボタンを押しました。つまり、二回続けて、押し  
たんです。僕とリンは道路の真ん中に倒れたまま。五メートル先まで迫っ  
ていたトラックは消えていました」

笠岡・リンが立ち上がる。

リン

トラックは？ どこに行ったの？

笠岡

そのまま通り過ぎたんだろう。

リン

私たちの上を？

笠岡

違う。トラックがぶつかる前に、僕らは時間を飛んだんだ。未来へ。

リン

信じられない。

笠岡

これを見て。(パーソナル・ボグロを示して) これは僕をこの時代に止め

リン

ておく装置なんだ。このボタンを押して、オフの状態にすると、僕は未来

笠岡

に戻り始める。もう一度押すと、また止まる。

リン

でも、どうして私まで？

笠岡

僕は君の体をつかんでいた。だから、一緒に飛んだんだろう。

リ 笠  
笠 岡  
リ 笠  
笠 岡  
リ 笠  
笠 岡  
リ 笠  
笠 岡  
リ 笠  
笠 岡  
リ 笠  
笠 岡  
リ 笠  
笠 岡  
リ 笠  
笠 岡

嘘じゃなかったんだ。おじさんは本当に未来から来たんだ。  
やっと思ってくれたか。でも、問題は今がいつかだ。オフにした  
のはほんの一瞬だったから、そんなに先の未来じゃないと思うけど。  
（指差して）向こうの空が赤っぽくなってる。今は夕方なんじゃない？  
同じ日の夕方であることを祈るよ。もし次の日だったら、君は無断外泊を  
したことになる。  
私、帰る。  
どこへ？ 失くした記憶は戻ったのか？  
ごめんなさい。私、嘘をついた。  
やっと思える気になったか。まあ、ちゃんと謝ったから、許してやろう。  
で、君は今、どこに住んでるんだ。送って行くよ。  
いいよ。一人で帰れるから。  
そうは行かない。僕は君のお父さんに空き巣だと思われてる。ちゃんと事  
情を説明して、それから君に怪我をさせたことをお詫びしないと。  
あの人は私のお父さんじゃないよ。  
じゃ、誰なんだ？  
私はお父さんを探してるの。それから、お母さんも。だから、家に戻って  
きたの。おじさん、明日の朝、もう一度、ここに来て。  
何のために。  
お父さんとお母さんがいる場所がわかったの。そこへ私を連れていってく  
れない？  
どうして僕が。  
約束したからね。（歩き出す）

笠岡 待てよ。もっと詳しく説明してくれ。

笠岡がリンの腕をつかむ。リンがパーソナル・ボグロのボタンを押し、笠岡を突き飛ばす。笠岡は転ぶが、すぐにパーソナル・ボグロのボタンを押す。リンの姿は消えている。

笠岡 「リンの姿はどこにもありませんでした。おまけに、周囲は真っ暗になっ

ていました。あのガキ……。僕は兄のマンションへ向かいました」

②夜。秋路の部屋。  
秋路がやってくる。

秋路 一体、今、何時だと思ってるんですか。もう十一時過ぎですよ。

笠岡 何月何日の？

秋路 えーと……。

笠岡 僕が最初にここへ来たのは、一九九二年の十月九日だった。で、今日は？

秋路 十月九日。同じ日ですよ。

笠岡 よかった。リンを無断外泊させずに済んだ。

秋路 今まであの子と一緒にだったんですか？ あの後、どこへ行ってたんです。

笠岡 どこにも行ってない。

秋路 そんなわけないでしょう。あなたが出ていった後、僕はすぐに後を追った

笠岡 んだ。でも、どこにも姿がなかった。

秋路 僕は未来へ飛んだんだよ。リンと一緒に。

笠岡 またその話ですか。

笠岡　　またって何だよ。お兄さんはまだ僕の話を信じてないの？

そこへ、絵子がやってくる。手には缶ビール二本。

絵子　光春さんもビールでいいですか？

笠岡　いや、僕は酒をやめたんで。申し訳ありませんが、水をもらえますか。

絵子　（秋路に缶ビールを渡しながら）お水ですね。了解しました。

絵子が去る。

秋路　（笠岡に）失礼して、先にいただきます。（飲み始める）

笠岡　お酒、よく飲むの？

秋路　僕はビールに目がなくて。でも、明日は初日なんで、これだけにしておきます。

笠岡　ウチのおじいちゃんも大酒飲みだった。飲み過ぎは心臓に負担をかけるんだよ。

秋路　あなたはいつやめたんですか？

笠岡　一週間前だよ。

秋路　そんな人に、偉そうにお説教してほしくないな。

笠岡　そこへ、絵子が戻ってくる。手にはコップ。

（笠岡に）お待たせしました。（コップを渡す）

絵子



笠岡 秋路  
笠岡 秋路  
秋路

ありがとうございます。で、お兄さんの方は？ あの後、どうしたの？  
赤磐さんに捕まって、怒られました。「リンはどこだ。リンを返せ」って。  
あの人、一体何者だったの？  
あの子の叔父さんでした。お父さんの弟。あの子は今、赤磐さんの家で暮らしてるんです。

そこへ、赤磐がやってくる。手にはタオル。

赤磐

大丈夫？ タオルを濡らしてきたから、これで冷やして。(タオルを差し出す)

秋路

すみません。(受け取って、頬に当てる)

笠岡

お兄さん、この人に殴られたの？  
顔を一発。役者は顔が看板なのに。

秋路

悪かったね。てつきり、誘拐犯だと思っちゃったからさ。

赤磐

赤磐さん、お仕事は？ ひよっとして刑事さんですか？  
ううん、普通の会社員だよ。どうして？  
刑事ドラマに出てくる、気が短くて、すぐに頭に血が上る刑事って感じだったんで。

笠岡

僕もそう思ったよ。  
(秋路に)それは誤解だよ。普段の僕はディズニー映画を見てボロ泣きする

赤磐

ような、気の優しい男なんだ。  
そうは見えなかったな。

笠岡

少し黙っててくれませんか。話の邪魔です。

赤磬 秋路 赤磬 秋路 赤磬

秋路 赤磬

秋路 赤磬 秋路 赤磬

赤磬

秋路 赤磬 秋路

でも、今日はリンのことで頭がいっぱいだったから。

あの子はあなたの姪なんですよね？

うん、一カ月前まで、この家に住んでたんだ。

今はあなたの家にいるんですか？

僕の兄は不動産関係の会社を経営してたんだけどね。その会社が倒産して、兄は数十億の借金を背負ったんだ。で、奥さんと二人で、夜逃げした。逃げる前に、僕の家に来て、「しばらくこの子を預かってくれ」って、リンを置いていったんだ。

行き先は？

わからない。「落ち着いたら連絡する」って言ったのに、何の音沙汰もない。こういうことはあんまり言いたくないんだけど、最悪の場合、もうこの世にはいないのかもしれない。

そんな。

君、テレビのニュースを見ないの？ 最近、増えてるだろう。「借金を苦

に一家心中」とか。

でも、あの子を預けていったってことは、いつか迎えに来るつもりだってことでしょうか？

もちろん、僕だって、そう信じてたい。リンにも、「必ずまた一緒に暮らせるようになる」って言い聞かせてる。でも、さすがに一カ月も経つと、不安になったんだろう。今朝起きたら、布団が空っぽになってた。

あの子はこの家の中を必死で探し回ってました。

「おまえの家は売ることになった。もう中には入れない」って言ったのに。あの子はまだ小学生でしょう？ 大人の事情は理解できないんですよ。

赤磐

秋路

赤磐

笠岡

赤磐

赤磐が去る。

絵子

笠岡

秋路

笠岡

秋路

秋路

絵子

生まれた時から何不自由なく暮らしてきたからな。一人っ子で甘やかされてもいたし。

確かに、ちよつとワガママなところはありましたね。

兄はリンのほしがるものを何でも買い与えてた。奥さんはリンを着せ変え人形にした。リンは自分のことをお姫様だと思ってたんじやないかな。

でも、それはあの子の責任じやない。

ウチはここほど広くないんで、リンは娘の部屋で寝起きさせてる。身の回りのことは全部自分でやらせてる。娘や息子と同じように。それがリンには我慢できなかったんだろうな。

あの子、どうして記憶喪失のフリをしたんだろう。正直に言ってくれれば、協力してあげたのに。

赤磐さんの家に連れ戻されると思ったんでしよう。リンは大人を信用してない。

で、光春さんの方は？ あの子とはどこで別れたんですか？

あの家の前で。隙をついて、逃げられたんだ。

どこへ行ったか、わかりますか？

赤磐さんの家に帰ったんじゃないかな。他に行く所はないし。でも、明日の朝、また来てくれるって言われた。あの家に。

また黙って抜け出すつもりか。

赤磐さんに知らせた方がいいんじゃない？ 秋ちゃん、連絡先は聞いた？

秋路 笠岡 絵子 笠岡 秋路 絵子 笠岡 秋路 絵子 笠岡 秋路 絵子 笠岡 秋路 絵子 笠岡 秋路 絵子 笠岡 秋路 絵子 笠岡

いや、気づいたら十二時を過ぎてて、慌ててあの家を飛び出したんだ。わかった。僕は明日、あの家に行く。リンに会ったら、赤磐さんの家に連れて帰る。じゃ、今夜はこれで。

どこへ行くんですか？

ホテルですよ。ここに泊まるわけには行かないし。

え？ 私は全然構いませんよ。秋ちゃんも構わないよね？

絵子ちゃんがいいって言うなら。

でも、お兄さんは僕が弟だって信じてないんだろう？

私は信じてますよ。

冗談だよ、絵子ちゃん？

だって、嘘にしてはあまりに荒唐無稽すぎると思わない？ お父さんに頼

まれて、様子を探りに来たなら、堂々と本名を名乗るはずよ。(笠岡に)

それに私、『バック・トゥー・ザ・フューチャー』が大好きなんです。

絵子ちゃん、あの映画はただのお伽話だよ。

今はね。(笠岡に) でも、二十三年後には現実になるんでしょう？

百年後だろうが、二百年後だろうが、現実にはならない。絵子ちゃんは文

系だから知らないだろうけど、これは既に証明されてることなんだ。

また人をバカ扱いして。私は四年で大学を卒業してるのよ。五年かけても

卒業できない人に、とやかく言われたくない。

まあまあ、夫婦喧嘩はやめてください。

僕らは夫婦じゃない。単に同居してるだけです。

そうなの？ ただそれだけの関係だったの？

もういい。二人とも黙って。

笠岡がパーソナル・ボグロのボタンを押す。

絵子　あれ？　光春さんは？

秋路　消えた。嘘だろう。

絵子　未来へ戻ったのよ。バック・トゥー・ザ・フューチャーしたのよ。

笠岡がパーソナル・ボグロのボタンを押す。秋路・絵子が叫ぶ。

笠岡　あれから何時間経ちました？

秋路　あなたは本当に光春なんですネ？

笠岡　だから、何度もそう言ってるだろう？　これで信じる気になった？

秋路　光春。(笠岡を抱き締める)

笠岡・秋路・絵子が去る。

二〇一五年三月三〇日朝。倉庫。  
フェンスが開く。吉本がクロノスを点検している。そこへ、倉敷がやってくる。

倉敷

課長、セルの点検、終了しました。

吉本

ご苦労様。君が手伝ってくれて、助かったよ。

倉敷

どういたしまして。でも、今さらですけど、こんなことをして、何か意味

吉本

があるんですか？ クロノスは二度と動かさないうですよね？

倉敷

野方さんの話によると、もう一度だけ動かす可能性はあるそうだ。今から

吉本

四十七年後に。

倉敷

そんな先の未来に、誰が使うんですか？

吉本

それは教えてくれなかった。まあ、思い当たる人物はいるけどね。それよ

倉敷

り、野方さんから連絡は？

吉本

まだです。会社にはとづくに着いてるはずなんですけど。

倉敷

ということは、笠岡君の手紙はまだ届いてないってことだな。

吉本

でも、永遠に届かない可能性もありますよね？

倉敷

それはそうだよ。手紙を預かった人が預かったことを忘れたかもしれない

倉敷

し、間違えて捨てちゃったかもしれない。届かない確率の方が高いんじゃないかな。

吉本 それは、笠岡君の人を見る目を信じるしかないな。  
倉敷 あの人、奥さんに逃げられたんですよね？ 奥さんて、どんな人だったんですか？

吉本 興味があるの？ 笠岡君のこと、あっさり振ったくせに。

倉敷 私は、笠岡さんに人を見る目があるかどうか、気になっただけです。  
吉本 わかったわかった。僕は奥さんには直接会ったことがないんだけど、電話

何度か話したことがある。優しそうな人だったよ。離婚した時、笠岡君が  
倉敷 言っていた。「全部、僕が悪いんです」って。「仕事に夢中になって、彼女

の寂しさに気づかなかった。彼女を追い詰めたのは僕なんです」って。  
吉本 そうだったんですか。私、誤解してました。噂で「逃げられた」って聞い

たから、もっと気が強い人かと。  
倉敷 彼には人を見る目がある。ウチには女子社員がいっぱいいるのに、君とい

う人を選んだ。まあ、婚約者がいることまでは見抜けなかったが。  
倉敷 あ、電話だ。(携帯電話を取り出して) 野方さんからです。(野方に) も

しもし。

別の場所に、野方がやってくる。手には携帯電話と封筒。

野方 やったぞ、倉敷君。たった今、手紙が届いた。

倉敷 笠岡さんからの手紙ですね？  
野方 そうだ。送ってくれたのは、名前を聞いて驚くなよ。瀬戸内絵子だ。

倉敷 瀬戸内絵子？ 本当ですか？  
吉本 誰だ、瀬戸内絵子って。

倉敷 知らないんですか？ 小説家ですよ、有名な。ベストセラーを連発してる

吉本 じゃないですか。

野方 僕は小説は読まないんだ。

倉敷 もしもし、倉敷君、聞いてるか？

野方 すみません。吉本さんが瀬戸内絵子を知らないって言うんで。

倉敷 吉本に「バカ」って言ってくれ。

野方 (吉本に) バカ。今のは、野方さんに言えって言われたんです。

吉本 野方さんに言ってくれ。「バカって言う方がバカだ」って。

倉敷 イヤです。(野方に) ということは、笠岡さんは二十三年前に、瀬戸内絵

野方 子に手紙を預けたってことですね？

倉敷 そうだ。今、そっちのパソコンに瀬戸内絵子の手紙を送った。読んでみる。

野方 (吉本に) 野方さんがパソコンにメールしたそうです。

吉本 今、確認する。(ノート・パソコンを操作して) 来た。添付書類がある

倉敷 ぞ。今、開く。(ノート・パソコンを操作して) 開いた。

倉敷 (ノート・パソコンを見て) 「前略、野方耕市様。突然、お便りして、申

し訳ありません。私は瀬戸内絵子と申します」

別の場所に、絵子がやってくる。

絵子

「この度は、笠岡光春さんのご依頼に従い、彼から預かった手紙をお送り  
します。同封しますので、お確かめください。この手紙は、私が笠岡さん  
から二十三年前に預かったものです。その頃、私は笠岡さんのお兄さんと  
一緒に暮らしていました」



倉敷  
吉本  
絵子

信じられない。お兄さんは瀬戸内絵子と同棲してたんだ。弟と違って、モテたんだな。

「そこへ突然、笠岡さんが訪ねてきて、弟の光春だと名乗ったのです。私もお兄さんも、最初は信じませんでした。笠岡さんはどう見ても、お兄さんより年上だったのだから」

あれだけ証拠を持っていったのに。

かえって、怪しまれたのかもしれない。

「しかし、笠岡さんは左手につけた装置を操作して、姿を消してみせました。そして、ほんの数秒後にまた姿を現しました。それを見たら、私もお兄さんも、笠岡さんの話を信じないわけには行かなくなりました」

（吉本に）この「装置」って、新型ボグですよ？

そうか。オフとオンを繰り返せば、小刻みに時間を移動できるんだ。でも、そんなことをして、エネルギーは大丈夫なのか？

いちいち感想を言っていないで、早く読み終えろ。

「笠岡さんは私に、この手紙を二〇一五年の三月二十九日に投函してほしいと言いました。私はその日が来るのを、首を長くして待ち続けました。こうして無事にその日を迎えることができ、心からホッとしています。よろしければ、笠岡さんにお伝えください。もう一度お会いして、あなたのお兄さんの話がしたいと。かしこ。瀬戸内絵子」

絵子が去る。

倉敷

笠岡さんは話さなかったんですね。元の時代には戻れないこと。

吉本 お兄さんが亡くなることも言わなかったんだろ。まあ、言えるはずもないか。

野方 (倉敷に) 読み終えたか？

倉敷 はい。笠岡さんはラッキーですね。よりによって、瀬戸内絵子と出会えるなんて。

野方 彼女のデビューがいつか、知ってるか？

倉敷 いいえ。

野方 今、検索した。十八年前の、一九九七年。笠岡君が会った時は、まだ普通のOLだった。

倉敷 それなのに、笠岡さんは手紙を瀬戸内絵子に託した。(吉本に) やっぱり人を見る目がありましたね。

吉本 (倉敷から携帯電話を取って) 野方さん、瀬戸内絵子は結婚してるんですか？

野方 旦那のことは書いてなかった。ということは独身なんじゃないか？

吉本 若い頃に、一生に一度の恋をしてしまったんでしよう。

倉敷 顔に似合わず、ロマンチストなんですな。

野方 余計な話はそれくらいにして、笠岡君の手紙を読め。

吉本 了解。(ノート・パソコンを見て) 「前略、野方耕市様。おかげさまで、無事に二十三年前に到達しました。この手紙は兄の部屋で書いています」

別の場所に、笠岡がやってくる。

笠岡

「僕は予定通り、一九九二年十月九日午前八時、メゾン飛田給の前に到着

吉本 野方 吉本 笠岡 倉敷 吉本 笠岡 吉本 野方 吉本 笠岡

倉敷・野方・吉本が去る。

しました。ところが、そこに姿を現した途端、事故が起きたのです。偶然、小学六年生ぐらいの女の子が通りかかり、僕と衝突してしまったのです」

野方さん、今までにこんなケースは？

一度もない。目標地点はなるべく人の通らない場所を選んできた。

呆れるほど、運の悪い男だな。

「その子はおでこに怪我をしていました。僕に突き飛ばされて、おでこを地面にぶつけたのです。少し血が出ていました」

お兄さんがなかなか出てこないな。女の子の話ばかりだ。

なるべく詳しく書こうと思っただけです。まじめな人だから。

「僕はその子を兄の部屋へ連れていきました」

野方さん、この手紙、全部で何枚ありました？

四十六枚だ。ちよつとした短編小説だな。

僕は小説は苦手なんです。

そう言わずに読め。それは、笠岡君が命を賭けた挑戦の記録なんだ。

「その子は記憶を失くしていました。でも、名前だけは覚えていました。リンという名前でした」

①一九九二年十月十日朝。秋路の部屋。  
笠岡が手紙を書いている。そこへ、秋路がやってくる。

秋路

笠岡

秋路

（笠岡に）何を書いてるんですか？  
手紙だよ。絵子さんから、便箋とペンを借りたんだ。

（便箋を見て）こんなにか？ まさか、昨夜は寝てないんですか？

僕は昨日、午前十一時から午後十一時に飛んだ。体内時計が半日ズレたんだ。だから、全然眠くなくて。それより、お兄さん、またですます体に戻ってるよ。

いや、あなたは光春だって、頭ではわかってるんですが、その顔を見ると。

おじさんにしか見えない？

はい。あ、すみません。

すみませんじゃなくて、すまんでもいいよ。

すまん。それより、絵子ちゃんは今？ もう出かけたのか？

七時過ぎに。あの人、普通の会社員だったんだね。昨日は朝帰りしてたから、てつきり夜のお仕事かと思っちゃった。

彼女は雑誌の編集をしてるんだ。毎月、入稿日は徹夜なんだよ。  
お兄さんは仕事はしてないの？

秋路  
笠岡

秋路  
笠岡

秋路  
笠岡

秋路  
笠岡

秋 笠 秋 笠 秋 笠 秋 笠 秋 笠 秋 笠 秋 笠 秋 笠  
路 岡 路 岡 路 岡 路 岡 路 岡 路 岡 路 岡

俺の仕事は役者だよ。  
でも、お芝居って、あんまりお金にならないんじゃないの？ 絵子さんも  
言ってたよね？ お芝居をやるにはお金がかかるって。  
ウチの劇団はまだ歴史が浅いから。  
お父さんの仕送りを芝居に注ぎ込んで、衣食住は絵子さん任せ？ それっ  
て要するに、ヒモだよ？  
着るものと食うものは自分で買ってる。公演のない時にバイトして。  
どんなバイト？  
道路工事とか、ビル掃除とか。  
お兄さん、僕は情けないよ。小学校から高校までずっと一番で、東京の大  
学に入ったお兄さんが、道路工事だなんて。  
道路工事だつて、立派な仕事だ。それに、劇団が有名になったら、ちゃん  
とギャラが出るようになる。テレビや映画の仕事も入る。  
それは仮定の話だろう？ 有名にならなかつたら、三十になっても、四十  
になつても、バイトのままだ。それで、絵子さんを幸せにできるの？  
俺はまだ二十三だ。結婚は考えてない。  
今は自分の好きなことがやりたい。そういうこと？  
光春、おまえは誤解してる。役者って仕事は、そんな甘いものじゃないん  
だ。見に来たお客さんを楽しませるために、力の限りを尽くす。命懸けの  
仕事なんだよ。  
だから、家族を騙してもいい、大学を辞めてもいいってわけ？  
それについては本当に謝る。せっかく会いに来てくれたのに、おまえをガ  
ツカリさせた。



秋路

光春、未来は一つじゃない。俺は俺の力で、別の道へ進んでみせる。(チケットを差し出す)

笠岡  
秋路

(受け取って)これは？  
芝居のチケットだ。今日から一週間、聖蹟桜ヶ丘の劇場でやる。今夜の回は七時三十分開演だ。よかったら、見に来てくれ。

秋路が去る。

笠岡

「午前八時、僕はリンの家に向かいました。試しにと思ってチャイムを鳴らすと」

② リンの家の前。

リンがやってくる。

リン

遅い。もう八時十分だよ。

笠岡

時間は約束してなかっただろう。まさかとは思うけど、昨夜はここに泊まったんじゃないだろうな？

リン

まさか。ちゃんと叔父さんの家に帰ったよ。

笠岡

今日、ここへ来ることは？

リン

手紙を置いてきた。

笠岡

よく見つからなかったな。

リン

夜が明けの前に出てきたの。昨夜は眠れなかったから。これって、時間を

飛んだからだよね？

笠岡 リン 笠岡 リン 笠岡 リン 笠岡 リン 笠岡 リン 笠岡 リン 笠岡 リン 笠岡 リン 笠岡 リン

一回目は仕方ないとして、二回目は君が勝手にやったんだ。ごめんなさいぐらい言ってくれてもいいんじゃないか？

ごめんなさい。じゃ、行こうか。

どこへ。

下田。そこに、お父さんとお母さんがいるの。間違いない。

リン。君は叔父さんの家に帰った方がいい。これ以上、叔父さんに心配をかけるな。

おじさんが行かないなら、私一人で行くよ。

お金はあるのか？ ないから、僕をここに呼びつけたんだろう？

まあね。でも、一人でだって行けるよ。タクシーで行って、向こうに着いたら、お父さんに払ってもらおう。

もしいなかったら？ 無賃乗車で警察に逮捕されるぞ。そうなくてもいいのか？

私はどうしても下田に行きたいの。止めても無駄だからね。

なぜ下田なんだ。そこにお父さんたちがいるって保証は？

これを見て。(写真を差し出す)

君の写真か。後ろに写ってる建物は？

ウチの別荘。でも、この別荘のことは、誰にも知られてないの。お父さんたちが隠れるなら、ここしかない。

でも、下田は遠い。電車で行ったら、三、四時間はかかるんじゃないか？

構わない。行ってくつて言ったら、絶対に行くの。

君って子は本当にお姫様みたいだな。いいよ。僕も一緒に行くよ。

本当？



笠岡

ただし、いくつか条件がある。お父さんたちに会えなかったら、素直に帰ること。二度と叔父さんに黙って家を抜け出さないこと。僕をおじさんと呼ぶな。いいな。

笠岡

三つ目が納得できない。僕のことでも赤磐さんのこともおじさんと呼ぶから、頭が混乱するんだ。僕のことには笠岡さんと呼べ。いいな？

笠岡

仕方ありません。僕とリンは飛田給駅に向かいました。公共電話で赤磐さんの家に連絡すると、奥さんが出ました。リンを下田に連れていくと言うと、意外とアツサリ認めてくれました」

飛田給駅。

リン

叔母さん、何か言ってた？

笠岡

「リンをよろしくお願いします」って。絶対反対されると思ったのに。

リン

あの人、私が嫌いなものよ。私なんかどうなってもいいと思ってるの。

笠岡

勝手に決めつけるなよ。

リン

笠岡さんはあの人を知らないでしょう？ 朝から晩までガミガミうるさくて、ウチのお母さんとは大違い。だいきらい。

笠岡

「飛田給から京王線に乗って、新宿へ。そこから、伊豆急下田行きの特急列車、スーパービュー踊り子に乗りました」

スーパービュー踊り子。

笠  
岡

下田まで何分かかかるの？  
二時間四十七分。眠くなったら、寝ていいぞ。昨夜は一睡もしてないんだ  
ろう？

笠  
岡

こんな時に、寝られるわけないでしょう？  
はいはい。じゃ、僕は失礼して、休ませてもらう。  
勝手にすれば。

笠  
岡

「でも、先に寝たのはリンの方でした。そして、二時間四十七分後、列車  
は終点の伊豆急下田に到着しました」

伊豆急下田駅。

笠  
岡

(リンに)で、ここから先は？  
タクシーに乗る。運転手さんには、「下田あじさいホテルまで」って言っ  
て。そこから歩いてすぐだから。

笠  
岡

タクシーに乗る前に、お昼を食べないか？ せっかく下田に来たんだから、  
海の幸を味わわないと。鮑、伊勢海老、金目鯛。

笠  
岡

そんな暇はない。コンビニのおにぎりで我慢して。  
「ホテルの前でタクシーを降りて、十分ほど歩くと、小さなログハウスが  
見えてきました。リンの写真に写っていた建物でした。」

別荘の前。

笠岡  
リン

（リンに）これ、どこで撮ったんだ？  
裏のテラス。ここには去年の八月に来たの。お父さんと二人で。お父さんは「俺の隠れ家だ」って言ってた。お金を貸した友達が、返せなくなっ  
て、かわりにここをくれたんだって。「お母さんも税務署も知らないんだぞ」  
って威張ってた。

笠岡

それは脱税と言って、法律に反する行為なんだ。

リン

知ってる。でも、お金持ちなら、誰でもやってることでしょう？

笠岡

「リンは鍵を持っていませんでした。玄関のドアを叩いて叫びました」

リン

お父さん！ お母さん！

笠岡

「何度叫んでも、ドアは開きませんでした。リンは建物の裏手に回りなが  
ら、叫び続けました」

リン

お父さん！ お母さん！

別荘の裏。

笠岡

「テラスの窓にも鍵がかかっていました。それでもリンは諦めませんでした」

リン

お父さん！ お母さん！

笠岡

これだけ呼んでも、出てこないんだ。中には誰もいないんだよ。

リン

お父さん！ お母さん！

笠岡

諦めろよ、リン。リン。（リンの腕をつかむ）

リン

放してよ！

笠岡

たぶん、君のお父さんは借金を返すために、ここを売ったんだ。もう、君

リン  
のお父さんのものじゃないんだよ。  
放してよ！

リンが笠岡の手を振り払い、その反動で転ぶ。

笠岡  
リン

絶対ここにいると思ったのに。もう他に思いつかないよ。

笠岡  
リン  
父さんにも迷惑がかららないし。連絡が来るのを待った方がいい。その方が叔

笠岡  
リン  
でも、早く見つけないと。

君は、お父さんとお母さんが死ぬと思ってるのか？

笠岡  
リン

……  
安心しろ。お父さんたちは死なない。君を残して死ぬわけがない。

笠岡  
リン  
どうして断言できるのよ。

笠岡  
リン  
会社が倒産した人はいっぱいいる。莫大な借金を背負った人もいっぱいいる。でも、その人たちがみんな死ぬわけじゃない。

新聞を読まないの？ 毎日、自殺の記事が載ってるじゃない。

笠岡  
リン  
日本の人口は一億二千万人だ。中には死を選んでしまう人もいるさ。でも、それはほんの一握りの人たちだ。彼らは絶望に打ち勝てなかった。僕に責める資格はないけど、できればもう一踏ん張りしてほしかったと思う。死んだら、何もできなくなるんだから。こうして海を見ることも。

笠岡  
リン  
おじさん、何言ってるの？  
おじさん、呼ばない約束だぞ。で、君のお父さんだけど、最後に別れる時、

笠岡 リン  
笠岡 リン  
笠岡 リン  
笠岡 リン  
笠岡 リン  
笠岡 リン  
笠岡 リン  
笠岡 リン  
笠岡 リン  
笠岡 リン

どんな顔をしてた。ちゃんと君の目を見て、話をしたか？

したよ。泣きながら、「必ず迎えに来る」って言った。

ほら、見る。お父さんはまだ絶望してない。もう一踏ん張りするつもりな

んだよ。

そうかな。

僕を信じろ。そして、君ももう一踏ん張りしろ。

もう一踏ん張りって？

待つんだよ。お父さんを。お母さんを。もう一度会える日を。

もし帰ってこなかったら、一生恨むからね。

好きにしろ。どうせ君に会うのは、今日が最後だ。

未来に帰るの？

ああ。そこで僕ももう一踏ん張りするつもりだ。じゃ、帰ろうか。

え？ 私も未来に行くの？

違う違う。東京へ帰るんだよ。あんまり遅くなると、叔父さんに叱られる。

……

リン。  
わかった。

笠岡

「帰りの電車で、リンはずっと外を見ていました。武蔵小杉で乗り換える時、僕は赤磐さんの家に電話しました。帰りが少し遅くなると。そして、次に聖蹟桜ヶ丘の劇場に電話しました」

一九九二年十月十日夜。聖蹟桜ヶ丘の劇場。  
絵子がやってくる。

絵子

光春さん！リンちゃん！

笠岡

絵子さん、芝居はもう始まっちゃいました？

絵子

ラッキーでしたね。舞台の準備が遅れてて、開演は十分オシだそうです。

笠岡

まあ、初日にはよくあることですよ。

絵子

お兄さんから聞いたんですか？ 僕らが来ること。

笠岡

喜んでましたよ、秋ちゃん。「光春は劇場には不慣れだろうから、案内してやってくれ」って言われました。

笠岡

ここに辿り着くまでが一苦労でしたよ。まさか、ショッピング・センター

絵子

の六階にあるなんて。

ビックリするほど、狭いですよ。二百人も入れれば、いっぱいになる。リンちゃんはどういう所でお芝居を見るの、初めてでしょう？

リン  
笠岡

絵子

笠岡

笠岡・リン・  
絵子が客席に座る。舞台に岡本役の秋路と竜馬役の役者が登場する。

岡本

竜馬

岡本

竜馬

岡本

竜馬

岡本

私は別に見たくなかったんだけど。

（絵子に）僕が強引に誘ったんです。絶対におもしろいから、見た方がいいって。おもしろいですよね？

そんなのわからないよ。今日が初日なんだから。あ、もう時間だ。中に入ろう。

「客席はお客さんで満員でした。僕らは真ん中の席に三人並んで座りました。兄が一番いい席を用意してくれたのです。やがて客席の照明が落ちて、お芝居が始まりました」

竜馬、頼みがある。

まさかとは思うが、わしにあの二人を説得しろと言うのではないろうな？ そうじゃない。どうやって二人を説得すればいいか、やり方を教えてほしいんだ。

やめちよけ、やめちよけ。おまんにわしの真似ができると思うちゅうがか。そんなの、やってみなくちゃわからないじゃないか。

やらんでもわかるぜよ。おまんのような意気地なしに、人の心を動かすことはできない。

意気地なしだと？

乗り物に弱いのはなぜじゃち思う。それは、おまんが怖がっちゅうからじや。死んだらどうしようとのう。  
（竜馬の脇差を抜き、剣先を自分の腹に向ける）

笠岡

「兄の役は、ツアコンなのに、なぜか乗り物に弱い、岡本という男。坂本竜馬に憧れていて、いつも頭の中で竜馬と話をしている、とても情けない男でした。」

竜馬

(岡本に) 何をする。

岡本

教えてくれないと、腹を切るぞ。

竜馬

腹を切ると、痛いぞ。

岡本

そう言えば、怖がつてやめると思ってるんだろう。甘いよ。ケイコさんと

岡本

本郷があんなふうになつたのは、俺のせいなんだ。二人が助けられないなら、死んだ方がマシなんだ。

竜馬

よし。そこまで言うなら、わしも止めん。男らしく切るがいい。

岡本

え？

竜馬

介錯はわしがしちやる。(と大刀を抜いて) あまり苦しまんように、スパ

岡本

つと首を落してやるきに安心せえ。(と構えて) いざ。いざ。いざ!

岡本

(脇差を腹に突きたてる。が、ちよつと触れただけで) 痛い痛い痛い!

竜馬

どうじゃ。思うたより痛いじゃろう。

岡本

もういいよ。俺一人で何とかするから。

竜馬

そう言うな。わしも久しぶりに、仕事つちゆうもんがしてみとうなつた。

岡本

それじゃ……。

竜馬

わしの言う通りにやれるかよ。

岡本

やってみせるさ。俺の手で、薩長同盟を結ばせてみせるさ。

岡本

岡本役の秋路と竜馬役の役者が去る。



笠岡  
絵子

リン

笠岡

薩長同盟？ どうしてツアコンが薩長同盟を結ばせるんだ？  
だから、それは比喩なんですよ。夫婦喧嘩をしている二人を、薩摩と長州  
に譬えてるんです。  
うるさい。上演中は口を閉じる。  
「お芝居は驚きの連続でした。でも、最も驚いたのは兄の顔。舞台の兄は、  
普段と全く違う顔をしていました。感情を剥き出しにして、大声で叫びま  
くって。最初はなんてオーバーな演技をするんだらうと呆れました。でも、  
お芝居が先に進むに従って」

舞台上に岡本役の秋路、ケイコ役の役者、本郷役の役者が登場する。岡本の手には紙袋。ケ  
イコの頭には帽子。本郷の手にはトランク。

ケイコ

岡本

ケイコ

岡本

ケイコ

岡本

ケイコ

岡本

ケイコ

岡本

ケイコ

岡本さんはどう思う？

どうって？

あの人と、イチからやり直した方がいいのかな。それとも。

それとも、何ですか？

他の人と、ゼロから始めた方がいいのかな。

他の人って？

たとえば、岡本さんとか。

…ケイコさん。

ねえ。岡本さんはどう思う？

志士ハ溝壑ニアルヲ忘レズ、勇士ハソノ元ヲ喪フヲ忘レズ。

どういう意味？

岡本

志を持つて天下を動かそうとする者は、自分の死骸が溝つぷらに捨てられている情景を決して忘れるな。勇気ある者は、自分の首がなくなっている情景を常に覚悟せよ、ということですよ。（ケイコの頭から帽子を取る）

ケイコ

何するの？

岡本

僕は何も持つてません。だから、これをください。

ケイコ

どうしてそれを？

岡本

形見です。この身はいつこの世から消えるかもしれない。その時の記念品です。

ケイコ

岡本さん……。

岡本

本郷を呼んできます。

岡本役の秋路が本郷役の役者に歩み寄る。

本郷

どうだった。

岡本

おまえの話を聞いてくれるってさ。

本郷

そうか。しかし、何て言えばいいのかな。

岡本

バカやろう！

岡本が本郷の胸ぐらをつかむ。本郷の顎が岡本の額に当たり、岡本が額を手で押さえて、ひざまずく。

笠岡

「その瞬間、劇場は凍りつきました。事故が起きたことは、誰の目にも明らかでした。兄の指の間から、血が滴り落ちました」

本郷  
笠岡

岡本、大丈夫か？  
「芝居を中断して、止血した方がいい。誰か早く芝居を止めてくれ。そう思った時」

本郷  
岡本

岡本。岡本。  
これぐらいの怪我、何でもない。(ハンカチを取り出して、額に当てて) そんなことより、ケイコさんの話だ。いいか、本郷。ケイコさんはおまえが好きなんだ。世界中に何十億って男がいるのに、どういうわけか、おまえなんかが好きなんだ。俺じゃなくて。それがどんなに凄いいことか、わからないのか？

本郷  
岡本

「ありがとう」って言えばいいんだな。  
これを持っていけよ。(紙袋を差し出して) それから、このトランクは俺がもらっていく。(本郷の手からトランクを取って) ツアーには俺が行くから、二人でゆっくりシーフード・スパゲティでも食えよ。

本郷  
岡本  
笠岡

岡本、いろいろありがとう。  
それでいい。今の感じでケイコさんにも言うんだぞ。  
「兄はハンカチで額を押さえたまま、演技続けました。怪我をする前と同じように。大声を張り上げて。僕はいつの間にか話に引き込まれ、怪我のことは忘れてしまいました。そして、ラストシーンがやってきました」

ケイコ役の役者と本郷役の役者が退場する。舞台に竜馬役の役者がやってくる。

竜馬  
岡本

とすれば、おまんとはこれでお別れのようにじゃのう。  
ああ。

竜馬 岡本 竜馬 岡本 竜馬 岡本 竜馬 岡本 竜馬 岡本

岡本役の秋路と竜馬役の役者が退場する。

一人で大丈夫かよ。  
竜馬も一人だったじゃないか。  
男はいつも一人なのよ。  
何言ってるんだ。おりようさんとは一緒になっただくせに。  
おまんもおりようを探すか。  
いつかは見つかるよな。  
見つかるとも。何と云うても、世界は広い。  
竜馬、また逢おう。  
べこのかあ。それはわしの科白じゃろうが。  
「暗くなると同時に、お客さんは一斉に拍手を始めました。僕も慌てて拍手しました。カーテンコールで出てきた兄は、笑顔でいっぱいでした。それ、僕の知らない兄でした」

絵子 笠岡 絵子 笠岡 絵子 笠岡 絵子 笠岡

あー、おもしろかった。おもしろかったですよね、光春さん？  
ええ、まあ。  
あら、お気に召しませんでした？  
いや、何だか胸がいっぱいで。  
イヤだ。目が赤いですよ、光春さん。ひよっとして、泣いちゃったんですか？  
泣いてませんよ。この時代に来てから、一度も寝てないから、目が疲れたんですよ。

絵子　まあ、そういうことにしておきますか。リンちゃんはもうどうだった？　おも

しろかった？

まあまあかな。

嘘。何度も大声を出して、笑ってたじゃない。

笑ってないよ。

いや、笑ってた。小学生にはちよつと難しいかと思つたのに。

バカにしないでよ。ウチのお母さんはミュージカルのファンだから、私も

よく一緒に行くの。お芝居には詳しいんだから。

そうだったの。で、秋ちゃん演技はどう思った？

無駄に声を張り上げすぎ、でも、見た目はカッコいいし、演技に変なクセ

もないし、将来が楽しみって感じかな。

参りました。

「僕は兄に会うために、楽屋へ行きました。目の前に現れた兄は、まるで

マラソンを完走した直後のランナーのように、ホツとした顔をしていま

した」

楽屋。秋路がやってくる。頭にタオルを巻いている。

絵子　秋ちゃん、怪我は大丈夫なの？

ビックリさせて、悪かったな。でも、ちよつと切っただけだから、心配な

い。

嘘。血がいつぱい出たじゃない。すぐに病院に行つた方がいいよ。

わかつたわかつた。それより、光春と話をさせてくれよ。(笠岡に) 本当

秋路

秋路

笠岡

絵子

リン

絵子

リン

笠岡 秋路 笠岡 秋路 笠岡  
繪子 リン 秋路 リン 笠岡 リン 秋路 リン 笠岡

に来てくれるとは思わなかった。ありがとう。  
こっちこそ、あんないい席に座らせてもらっちゃって。しかも、リンまで。  
リン、お礼は？  
ありがとうございます。  
ありがたいお返しして。それより、お芝居の感想は？  
とってもおもしろかった。  
あれ？ さっきは「まあまあ」って言ってたのに。  
タダで見せてもらったんだから、褒めるのが礼儀でしょう？  
じゃ、本音は「まあまあ」の方？  
そんなことない。  
リンちゃん、ひよつとして、緊張してるんじゃない？ 私も最初に楽屋に  
来た時は緊張したのよ。ついさっきまで舞台に立ってた人が、自分の目の  
前に来るから。  
わかるわかる。僕も今、非常に居心地が悪い。お兄さんと話をするのが、  
照れ臭い。  
そう言わずに、正直な感想を聞かせてくれよ。今後の参考にするから。  
僕には芝居のことはわからないよ。  
何でもいいんだ。芝居を見ながら感じたことを言ってくれ。  
参考になるかどうかはわからないけど、この劇場に来るまで、僕もリンも  
最低の気分だった。リンなんか、開演直前まで、「見たくない」って言っ  
てたんだ。でも、芝居が始まって一時間もしたら、隣から笑い声が聞こえ  
た。リンの笑い声だよ。それで思い出したんだ。今朝、お兄さんが言った  
こと。

秋路  
笠岡

絵子  
秋路  
笠岡

何を言っただけ？

「役者って仕事は、そんな甘いものじゃないんだ。見に来たお客さんを楽

しませるために、力の限りを尽くす。命懸けの仕事なんだよ」

それ、秋ちゃんの口癖です。酔っ払うと、必ずそう言うんです。

絵子ちゃん、弟の前で恥をかかせないでよ。

お兄さんの芝居はリンを笑わせた。今のリンを。それだけで、十分に価値があると思う。すばらしいと思う。

秋路・絵子が去る。

笠岡

「劇場の外に出ると、赤磐さんが立っていました。武蔵小杉で電話した時、芝居を見てから帰ると言っていたのです」

①一九九二年十月十日夜。劇場の前。  
赤磐がやってくる。

赤磐

リン。

笠岡

すみませんでした。こんな時間まで、リンちゃんを連れ回して。

赤磐

いや、こちらこそ、リンのワガママに付き合わせてしまっただけ。ご迷惑だったんじゃないですか？

笠岡

僕は全然。赤磐さんこそ、心配なさっただけでしょう。見ず知らずの人間にリンちゃんを預けるなんて。

赤磐

家内から聞いた時はビックリしましたよ。「なぜ行かせたんだ」って、怒鳴ってしまいました。お恥ずかしい話ですが、家内はリンを引き取ったこと

リン

とに腹を立ててまして。何しろ、ウチには子供が三人もいるものですから。

赤磐

私が邪魔なんだよね。叔父さんはそんなこと、思っていないぞ。叔母さんだって、おまえがもつと

いい子にすれば。



赤磐 笠岡 リン 笠岡  
赤磐 リン 笠岡 赤磐 笠岡 リン 笠岡  
赤磐 リン 赤磐 リン

いい子にして、気に入られるって言うの？ ペットみたいになれって言うの？  
そうじゃない。叔父さんはただ、もう少し素直になれって言うの。  
私はもう子供じゃない。ああしろこうしろって、いちいち命令されたくない。  
なあ、リン。おまえが今、凄く辛いのはわかる。お父さんとお母さんに会  
えなくて、さぞかし寂しいだろう。でも、叔母さんだって、子供を四人も  
育てるのは大変なんだ。  
それなら、私のことは放っておけばいいじゃない。  
リン。君は今、子供じゃないって言ったな？ だったら、苦労している叔  
母さんを助けてあげるべきじゃないか？  
私が？ どうやって？  
家事を手伝うんだよ。洗濯物を畳むとか、庭掃除をするとか。  
ウチはマンションなんで、庭はないんです。  
(リンに) じゃ、ベランダを掃除するとか。  
わかった。やるよ。  
本当か？  
でも、明日はちよつと行きたい所があるの。(笠岡に) お父さんたちがい  
そうな場所を思い出したんだ。今度は絶対に間違いない。だから、また連  
れていって。  
言ったはずだぞ。迎えに来るのを待って。  
あと一カ所だけ。そこにいなかったら、諦めるから。  
悪いけど、無理だ。僕は未来へ帰るから。  
今、どこへ帰るって言いました？

リン

（笠岡に）そんなに急いで帰ることないじゃない。もつとこの時代についてよ

赤磐

リン、おまえまで何を言い出すんだ。

笠岡

（リンに）残念だけど、それは不可能なんだ。見ろよ。（パーソナル・ボグを示して）黒い線がもう二本しかない。この二本が消えたら、この装置は自動的に止まるんだ。

赤磐

その装置は何ですか？

リン

叔父さんは黙ってて。（笠岡に）エネルギーが切れるってこと？

笠岡

ほら、昨日、何度も止めたり動かしたりしただろう？ あれでエネルギーをたくさん使っちゃったんだ。この分だと、明日の朝まで持ちそうにない。君とはこれでお別れだ。

リン

そんなの、イヤだ。

笠岡

君が何を言っても、これだけは動かさせない。諦めるしかないんだよ。

リン

次に会えるのはいつ？ 二十三年後？ その時、私が会いに行ったら、会ってくれる？ 話をしてくれる？

笠岡

もし会えたらね。

リン

笠岡さんて、奥さんいるの？

笠岡

いないよ。いきなり何を聞くんだ。

リン

だったら、私が奥さんになってあげる。その時には三十五歳になってるはずだから。

笠岡

おいおい、その年まで結婚しないつもりか？

リン

わかった？ 二十三年後に結婚するんだからね。約束だからね。

笠岡

わかった。約束する。

赤磐 (リンに) 叔父さんはもう少し早い方がいい気がするな。

リン いいの。私は決めたの。

赤磐 じゃ、帰ろうか。(笠岡に) 今日には本当にありがとうございました。

笠岡 いいえ。さよなら、リン。

リン そうだ。私、本当の名前を言っただけでなかったよね？ 私の本当の名前は、赤

磐のぞみ。

笠岡 のぞみ？ じゃ、リンていうのは？

赤磐 あだ名ですよ。臨時の臨という字を書いて、「のぞみ」と読むんです。

リン さよなら、笠岡さん。

リン・赤磐が去る。

笠岡 臨時の臨で「のぞみ」。確か、倉敷さんも同じ名前だったはずだ。まさか、

あのリンが大人になって……。ないない。もしそうだとしたら、最初にP・フレックで会った時に言ったはずだ。「僕は絵子さんと一緒に、飛田給に帰りました」

## ② 秋路の部屋。

笠岡が手紙を書き始める。そこへ、絵子がやってくる。手にはコップ。

絵子 また手紙ですか？

笠岡 すみません、便箋を大量に使っちゃって。あと少しで書き上がりですから。書き上がったら帰るんですか、未来へ。

笠岡  
絵子

笠岡  
絵子

笠岡  
絵子

笠岡

笠岡  
絵子  
笠岡  
絵子

赤磐

電話が鳴る。

いや、できれば、兄に挨拶してからと思ってるんですが。明日遅いなあ、秋ちゃん。きつと、劇団の仲間と飲みに行っただんですよ。明日も本番があるから、朝までは飲まないと思えますけど。

兄はそんなに酒が好きなんですか？

お酒そのものより、みんなでわいわい話するのが好きみたいです。そんなことより、さっきの話ですけど。

リンの話ですか？

あなたの同僚の倉敷さん、やっぱり怪しくありませんか？ 臨と書いて「のぞみ」。けっして珍しい名前じゃないけど、ありふれてるわけでもない。

あなたの周りに同時に二人も存在するなんて、偶然とは思えません。

でも、二人は見た目が全然違うんです。リンが二十三年後に倉敷さんになるとは思えない。

女は成長すると顔が変わるんですよ。お化粧すれば、もつと変わります。でも、苗字の違いは？

養子に行ったとは考えられませんか？ 倉敷さんて人の家に。

赤磐さんがリンを養子に出すとは思えません。奥さんに反対されたのに、引き取ったんですから。

絵子が去る。別の場所に、赤磐がやってくる。手には電話の子機。

夜分、遅くに申し訳ありません。私、赤磐と申します。そちらに、笠岡光春さんはいらっしゃいますか？

絵子が戻ってくる。手には電話の子機。

絵子 はい、少々お待ちください。(笠岡に) 赤磐さんです。(受話器を渡す)

笠岡 (赤磐に) 代わりました。笠岡です。

赤磐 突然電話して、申し訳ありません。実は、リンが家に帰ってくるなり、家

内に謝ったんです。勝手なことをして、すみませんでした。家内はす

っかり感動しちゃって、リンを抱き締めて、おいおい泣き出したんです。

笠岡 よかったですね、仲直りできて。

赤磐 全部あなたのおかげです。あなたがリンに言ってくれたから。それで、ど

うしてもお礼が言いたくて、電話したんです。本当にありがとうございます

ました。それじゃ。

笠岡 ちよつと待ってください。赤磐さんに一つ聞きたいことがあるんです。

赤磐 何でしょう？

笠岡 倉敷。倉敷という苗字に、何か記憶はありませんか？

赤磐 もちろんありますよ。倉敷はリンの母親の旧姓です。それが何か？

笠岡 いいえ、何でもありません。それじゃ、リンちゃんによろしく。

赤磐 失礼しました。

赤磐が去る。

笠岡 絵子さん、大変です。

絵子 赤磐さんの声、私にも聞こえました。

笠岡 つまり、こういうことでしょうか？ リンは何年か先に、母親の実家に引

絵子 笠岡 絵子 笠岡 絵子 笠岡 絵子 笠岡 絵子 笠岡 絵子 笠岡 絵子 笠岡 絵子 笠岡

き取られる。それで、倉敷のぞみという名前になる。その推理で間違いないと思います。

なんて人だ。四年も一緒に働いてたのに、黙ってたなんて。

倉敷さんは歴史を変えなくなかったんじゃないですか？何か言ったら、あなたは二十三年前に行かなくなるかもしれない。

いや、小学生の時の倉敷さんに会えるって言われたら、喜んで行きましたよ。

それだと、あなたはリンちゃんの正体を知った上で、リンちゃんに会うことになりますよね？倉敷さんが小学生の時に会った笠岡さんは、何も知らなかった。だから、言わなかったんですよ。

やっぱり、倉敷さんはリンだ。意思の強さは全然変わってない。未来へ帰るのが楽しみですね。倉敷さんと再会したら、何て言うつもりですか？

再会したら？

ええ。

再会したら、その時、倉敷さんは……。

どうしたんですか、光春さん？

絵子さん、お願いがあります。この手紙を二十三年後の、二〇一五年の三月二十九日に投函してくださいませんか？

二十三年後？それまで、ずっと持ってるって言うんですか？

面倒なことを頼んじゃって、すみません。でも、あなたなら、信用できる。お願いします。

わかりました。二〇一五年の三月二十九日ですね。（便箋に手を伸ばす）笠岡

絵子

まだ書き終わってません。あと少しだけ、待ってください。最後に一つだけ、書き加えたいことがあるんで。ごゆっくり。

絵子がコップを持って去る。

笠岡

「最後に一つだけ、書き加えたいことがあります。倉敷さん、どうか幸せになってください。六十歳のあなたに会うのを楽しみにしています」

絵子が戻ってくる。笠岡が便箋の束を封筒に入れて、絵子に渡す。

一九九二年十月十日夜。メゾン飛田給の前。

絵子　　あ、星が出てる。明日は天気がよさそうですよ。  
 笠岡　じゃ、僕は駅に行きます。手紙のこと、よろしく願います。  
 絵子　　私も一緒に行きますよ。  
 笠岡　いや、兄に会う前に、エネルギーが切れるかもしれないし。ここでお別れ  
 絵子　　しましよう。  
 私、光春さんに会えて、とてもうれしかったです。私が作家だったら、絶  
 対に小説にするとおもいます。  
 笠岡　すればいいじゃないですか。編集者なら、文章を書くのは得意でしょう？  
 絵子　　全然。本を読むのは大好きだけど、書くのは苦手です。  
 笠岡　でも、僕は読んでみたい。ぜひとも挑戦してみてください。  
 絵子　　わかりました。でも、きつと途中で挫折すると思いますよ。  
 笠岡　いやいや、絵子さんなら最後まで書けますよ。未来でその本を読むのを楽  
 しみにしています。それじゃ、お元気で。  
 光春さんもお元気で。

絵子が去る。



笠岡

(パーソナル・ボグロを見て) ああ、もう黒い線が一本しかない。お兄さんには会えそうもないな

そこへ、倉敷がやってくる。

倉敷

笠岡さん。

参ったな。睡眠不足で、目がおかしくなったみたいだ。倉敷さんの幻が見える。

倉敷

幻じゃありません。実物ですよ。実物だって主張してる。そんなこと、あるわけないじゃないか。実物だったら、こうして肩に手を伸ばせば、(倉敷の肩をつかんで) おかしいな。

つかめちゃった。

(笠岡の手を叩いて) 触らないで!

(手を押さえて) いったあ……。

おかしなことをしたら、警察を呼ぶよ。

そのセリフは昨日、リンと初めて会った時。

二十三年前、笠岡さんと初めて会った時、私が言ったセリフです。

倉敷さん、君がどうしてここに?

笠岡さんを迎えに来たんですよ。クロノス・ジョウンターに乗って。

クロノスに?

これを読んで、どうしても会いたくなかったです。(便箋を差し出す)  
それはついさつき、絵子さんに預けた手紙だ。

倉敷 笠岡  
倉敷 笠岡  
倉敷 笠岡  
倉敷 笠岡  
倉敷 笠岡  
倉敷 笠岡  
倉敷 笠岡

倉敷

絵子さんにはちゃんと約束を果たしましたよ。手紙は、笠岡さんが出発した直後に届きました。これは最後の一枚。これだけ、野方さんにもらったんです。(手紙を読んで)「倉敷さん、どうか幸せになってください」

そこへ、野方・吉本がやってくる。

吉本

野方さん、僕は反対です。

倉敷

なぜですか、課長。

吉本

決まってるだろう。君が僕らに嘘をついていたからだ。君は何もかも知っていた。笠岡君が二十三年前に行くことも。そこで、君に会うことも。

倉敷

黙っていたことは謝ります。でも、それで何か影響がありましたか？

吉本

君は最初から二十三年前に行くつもりだった。そのために黙っていたんだ。

野方

そうなのか、倉敷君？

倉敷

行けたらいいなとは思っていません。

吉本

二十三年前に行つて、何をするつもりだ。

倉敷

何も。私は笠岡さんに会えれば、それでいい。今、行かなければ、次に会うのは二十五年後になつてしまうから。

吉本

本当にそれだけか？ 歴史を変えるつもりじゃないのか？

野方

吉本、俺は倉敷君を信じるぞ。

吉本

本気でるか、野方さん。

野方

俺は今の彼女と同じ目をした人間に、何度も会ってきた。(倉敷に) 君は

倉敷

この日のために生きてきた。そうだろう？

倉敷

そうです。二十三年前に別れた時から、この日が来るのを待っていました。

野方

吉本

野方

吉本

野方

行かしてやろう、吉本。

しかし、野方さん。

クロノスの力で、二人の人間が幸せになるんだ。最後の仕事として、申し分ないと思わないか。

しかし、人間を飛ばすと、莫大な電力を消費するんです。二回も続けて飛ばしたら、絶対にバレますよ。それで電気代だって。

みみっちいことを言うな。今すぐ、クロノスを再起動させるんだ。

野方がテーブルの上のノート・パソコンのキーを叩く。フェンスが開いて、奥のクロノス・ジョウウンターが姿を現す。野方・吉本が去る。

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷

笠岡

倉敷さん、一つだけ確認させてくれ。君が言った婚約者って言うのは？

婚約したのは、私が十二の時です。

あれが婚約？ ただの口約束じゃないか。

笠岡さんは本気じゃなかったんですか？

そういうわけじゃないけど。君はあの後、どうなったんだ？

半年後に、両親が迎えに来てくれました。でも、二人は離婚することにな

って、私は母に引き取られたんです。

そうか。お母さんと暮らすことができたのか。

私は一生懸命勉強しました。研究者になつて、P・フレックに入れば、笠

岡さんに会えると思つたから。それなのに、笠岡さんはP・フレックにい

なかつた。五年経つて、やっと会えたと思つたら、結婚してやがった。

ごめん。

倉敷  
笠岡

笠岡  
倉敷

そこへ、秋路がやってくる。

秋路  
笠岡  
秋路  
笠岡  
倉敷  
秋路  
笠岡  
秋路

許します。その時の笠岡さんはまだ私と婚約してなかったんだから。そう言えばそうだ。謝って損した。

笠岡さんが二十三年前から戻ってきたら、すべてを打ち明けるつもりでした。でも、そこで大変なことがわかった。笠岡さんが戻るのは今じゃない。二十五年後の未来だって。

それで、君もクロノスに乗ったわけか。

よく頑張ったでしょう？一言ぐらい、褒めてくれてもいいんじゃないですか？  
本当によく頑張った。偉いぞ、リン。

光春、その人は？

この人は僕の婚約者だよ。名前は倉敷のぞみさん。

婚約者だと？ そんな人がなぜここにいるんだ？

僕に会いたくて、未来から来たんだってさ。

驚いたな。おまえがそこまでモテるとは思わなかったぞ。(倉敷に) 初めまして。兄の秋路です。

倉敷です。私、今日のお芝居を見ました。とってもおもしろかったです。本当ですか？ どうもありがとう。

お兄さん、僕たち、そろそろ帰るよ。

未来へか？

うん。(パーソナル・ボグを示して) もうすぐエネルギーが切れるんだ。

秋路 光春、俺は役者を続けるからな。そして、いつか必ず、一流の役者になつてみせるからな。

秋路 期待してるよ。でも、そのために、一つ約束してほしいことがある。

秋路 何だ。

秋路 酒をやめてくれ。たった今から。

秋路 どうしてもか。

秋路 ああ。

秋路 どうしても？

秋路 どうしてもだよ。お願いだ。

秋路 わかった。約束する。

秋路 じゃ、行くよ。

秋路 倉敷さん、光春をよろしくお願いします。

秋路 お元気で。必ず未来で会いましょう。

秋路 お兄さん、また逢おう。  
バカ、それは俺のセリフだ。また逢おうな、光春！

秋路 笠岡と倉敷がパーソナル・ボグロのボタンを押す。クロノス・ジョウンターが眩しく輝き、轟音を発し、煙を吹き出す。